

あり×まり人間剥製



幻想だけでは生きていけない。

幻想無しで生きることには耐えられない。

七色の人形使い「アリス・マーガトロイド」は呟いた。

「魔理沙、やっと貴女を捕まえた。これから貴女を私だけのお人形...可愛い可愛い縫い包み、『人間剥製』にしてあげるわ」

第一章 『腹話術』

話は3日ほど前に遡る。その日もアリスは操り人形を作るため鑿と槌を振り木地を削っていた。

カンカン、コンコンという槌音と、ゴスツ、ゴスツという小刀で乾燥した堅い木を削る音が交互にアリスの工房（アトリエ）に響く。

一見して非力な少女にしか見えない彼女の細腕のどこにそんな力があるのか、一抱えもある太さの丸太が見る間に削られ、人形の頭へ、胴体へ、四肢へ...と形作られていく。

彼女の使う工具が、刃物がそれだけ鋭利な名のある職人の業物であるということでもあるが、他にも秘密があるのかもしれない。

いつまでも続くと思われた作業が、「うっ！」という微かな悲鳴で中断される。

見ると、アリスの指に血が滲んでいる。とても赤い、赤い血だ。

作業台に並べられた椅子にちょこんと座っていたアリスの一番のお気に入りの人形...上海人形が言った。

「アリス、考え事してる。仕事中心がよそ見しているよ。また魔理沙のコト考えるのね」

アリスの顔にカッと血が上る。白磁の人形のような肌が薔薇色に染まる。

アリスは確かに魔理沙のことを考えていたが、自分が魔理沙のことを考えていることに気づいていなかった。

作っている人形のことを考えながらも、魔理沙の姿を、声を、においを無意識のうちに頭の中で何度も何度も繰り返し再生していたのだ。

アナログの記録媒体は、再生を繰り返すことによって少しずつ情報が劣化していく。デジタルなメディアは基本的には劣化もしないが良くもならない。しかし、アリス

の記憶の中の魔理沙の姿は再生の度に醜い部分が削ぎ落とされ、美しい部分が強調され、際限なく理想化されていくようだ。

アリスは、工房の片隅の、人形の服を作って余った布を詰め込んである籠から無造作に端布（はぎれ）を引っぱり出し止血をした。

作業を中断し、ため息をつく。

膠を煮たり、焼き鑊を加熱するために夏でも火を入れている薪ストーブに乗せられた薬缶のお湯でコーヒーを淹れる。

来客があるときは、小柄でかわいらしいティーセットで紅茶を飲むアリスも、作業場では疲れをとるために専らコーヒーを飲んでいる。

地獄のように熱く、悪意のように黒く、後悔のように苦く、欲情のように香り発ち、情事のように濃厚で、誘惑のように眼が啓ける（恐れるな、失うものなど何も無い。寧ろお前の目は啓け、力は天にも届くだろう...）焦げ臭いブラックコーヒーを大柄の、ちょっと茶渋の染み付いたマグカップにたっぷりと淹れ、貪欲な竜がその欲望の赴くまま腹を満たそうとするが如く、腰に手をあて、「んくっ んくっ」と喉を鳴らし、最後は斜め 45°を見上げるようにして咽喉も焼けるといわんばかりに一気にコーヒーを飲み干す。

カフェインと熱気で中枢神経の昂ぶったアリスの目が、時計仕掛けのようにぐるり・ぐるりと回りだす。

【宣伝】



アリスのマグカップ ... お譲りします、貴方に。

極東神殿騎士団 <http://luminel.pro.tok2.com/>

アリスはそれまで、意識をせずに魔理沙の面影を頭の中で反芻していたが、そのことについて考えてみる。

自分が「無意識に魔理沙のことを考えていた」という事実を認識するということは、どうしても「魔理沙のことを意識的に考える」ということに行きついてしまう。

アリスは考える。

「私が魔理沙に出会ったのは、いつだったかしら…」

「だいぶ昔のような気もするし、つい最近だったような気もする」

「あれは、半年前？ 1年前？ 3年前？ それとももともとずっと前だったかしら？」

「わからない…」

もしかしたら、それを考えること自体に意味がないのかもしれない…

二人が出会ったことは確かだが、それがいつだったか、日時を具体的な数値で思い出そうとするといつもこうなる。

数には強いはずのアリスが、このことになるとまったくお手上げである。おかしな話だ。

もしかしたら、二人が出会ったときの強烈な印象も、すべては幻想だったのかもしれない。

アリスは、俯き、柔らかそうに緩くウェーブのかかった白金髪（プラチナブロンド）の頭をふるふると振って否定する。

「あれが幻想のわけない」「あれが私だけの思い込みなんかのはずない」

それは、冬がいつまでも続き、暦の上ではとっくに初夏になっているはずの時期にまで雪が降り続いていた年のことだった。

自分の家の上空、アリスのテリトリーを侵し、結界を突き破って高速で飛んでいく存在に気づいたアリスが、領空侵犯者にお仕置きをしてやろうと上空に上がると、そこに魔理沙がいたのだった。

広いつばのついた黒いとんがり帽子をかぶり、黒服を着て、箒に乗って飛ぶ、ハロウィンの仮装にありがちなステレオタイプの魔女のコスチュームに身を包んだ少女、それが霧雨魔理沙だった。

アリスは、相手はすぐに逃げていこうと考え軽い攻撃を加えたが、黒衣の魔法少女はアリスの攻撃を巧みにかわしつつ、しぶとく反撃を繰り返してくる。

こうなったら、ちょっと手荒なことをしてでも相手を屈服させてやろう、今までよくがんばったけれどこれまでね、ちょっと痛い思いをするだろうけれど、怪我をしたら介抱してあげるわよ... とアリスは思い、スペルカード発動のタイミングを計ったが、その矢先に情報収集・解析担当のハンガリー人形が警告を発した。

「目標内部に高エネルギー反応、縁周部を加速、収束していきます」

「なんですって!？」

アリスが訊き帰す間もなくそれまで感じたことのない衝撃がアリスを襲った。

極太の光の柱がアリスの肉体の中心を貫いたかと思うまもなく。熱く飛び散る白いビームがまるでホースで庭に水を撒くかのごとくアリスの全身にくまなく浴びせ掛けられたのだ。

「うぼぁー」

肺の中の空気が熱せられて膨張し、腹腔中の水分が瞬間的に蒸発して水蒸気となり、アリスの体中の穴という穴からガスとなって噴出した。

笛吹き薬缶の原理で、アリスにとっては甚だ不本意な絶叫が魔法の森一帯に響き渡る。

アリスは白濁していく意識の中で、自由落下の際の無重力感を味わっていた。それは一瞬の出来事のはずなのに、永遠とも思えるほど永く感じられた。

アリスが気付くと、すでに周囲は暗闇に覆われ、先ほどまでの小雪に替わって遅い春の到来を告げる雨が降り注いでいた。

アリスの全身には、七輪で食べごろに焼かれた秋刀魚のような焦げ目と火ぶくれが出来ていた、その火傷の痕からは熱く透明な体液... 琳派液が滲み出していた。



いや、それは琳派液などと呼べるものではない。血液すらも熱によって脱色され、ジュークジュークと沸騰したジューシーな肉汁・旨味汁となって周囲に美味しそうな香りを漂わせていたのだ。

アリスの体の中心にはぽっかり穴が開き、焼け火箸を突っ込まれたように痺れるその穴からはジューシーな旨味汁がしたり、歩くと体が二つに裂けそうだ。まるで自分の体が消化器を中心とした一本の管になり、その管の端をひん剥いて、さながらちくわを裏返すかのようにカラダの内側と外側をひっくり返しにされたようなめっちゃくちゃな気分。

プライドなどズタズタに引き裂かれ、恥も外聞もなく、濡れ落ち葉と泥と、焼け焦げた服の断片を体表にへばりつかせ焼き捨てられた人形のような姿でアリスは家路についた。

それから数日、アリスは生死の境... 存在と消滅の境界をさまよい、その後も月が一巡りする間、ほとんど寝たままですごさねばならなかった。最初は焼肉・焼き魚のような匂いを発していたアリスの体液も、時間とともに発酵が進み、鯛の押し寿司のような酸っぱい匂いとなって、起き上がることもままならぬアリスのベッドのシーツにカピカピに乾いてこびりついた。

「私、死ぬのかしら」「このまま気を失って、真っ暗な闇の中に消えて、二度と目を覚まさないのかしら」アリスはぐるぐる回る目眩の中で、何度も繰り返し自分の死を思った...

思い出すだけで惨めで、思い出すだけで恐ろしく、思い出すだけで返しをしてやりたくなる。

「私が味わったのと同じくらい惨めで、同じくらい恐ろしく、同じくらい痛い思いをさせてやりたい...」

そう考えると、ここにはいない魔理沙に対してアリスの体は震え、歯を食いしばり、手のひらを強く握り締め、呼吸と脈拍が知らず知らずのうちに上昇してしまうのだった。

その後何度か、神社の祭礼の場などでアリスは魔理沙をみかけたが、魔理沙はいつも楽しそうに巫女や紅魔館の図書館長などと話をしている。

アリスはジリジリした思いで魔理沙が自分以外の誰かと楽しげに話しているのを盗み見る。

「私に、あんなに惨めで、恐ろしくて、痛くて、苦しくて、恥ずかしい思いをさせておきながら、どうしてそんなに楽しげにしているのよ」

「私にあんな恥ずかしい思いをさせておきながら、自分だけはのうのうと、へらへらと脳天気になんか笑っている、その神経が癪に障るのよ」

「いったい、なんの話題でそんなに楽しげに盛り上がっているのよ？ まさか、私の無様な姿を吹聴して、みんなで嘲笑っているの？ きっとそうだよ、そうに決まっている。非道い、非道過ぎる！許せない！！」

「それに、あんなに暗い冷たい雨の夜に私を置き去りにすることないじゃない」

「私が消滅してもなんともないと思っている、あの時も、そして今でもきっと」

「せめて私が気を取り戻すまで、そばにいてくれたってよかったじゃない」

「私の本当の姿を見てしまったのなら、責任を取って欲しい、私の本当の姿を見ていないなら... 私にあれだけのコトをしておいて、墜ちていく私を見ようともせず立ち去るなんて、そんなこと絶対に許せない」

(私が、私があんなに美味しそうに焼けていたんだから、あったかいうちにせめて一口くらい喰べてくれればよかったじゃない...)

(一口喰べれば、きっと二口目も喰べたくなる... そうさせる自信があるのに)

(二口喰べたら、もう止まらなくなって・もう我慢できなくなって最後まで喰べたくなるくらい私は美味しいのに)

(全部喰べ終わってから、満足そうに・幸せそうに、からっぽになった私を見下ろして『美味しかった』って言って欲しかったのにいいいい!!!)



アリスが物思いにふけていると、それまでずっと黙っていた上海人形が突然しゃべり出した。

「アリスは魔理沙にそばにいてほしいのね」

「アリスは魔理沙が好きなのね」

ボキッ

上海人形の首が折れる音がアリスの工房に響き渡る。

「怒った、アリスが怒った」

「怒るのは凶星、凶星だから怒る」

アリスは言う。

「そうよ、その通りよ、私は馬鹿な女よ」

「これじゃまるで、馬鹿な男の劣情を刺激することを至上の目的に、さらなる馬鹿な男が、愚劣で破廉恥な妄想のおもむくまま、いやしさに任せて書き殴った陳腐で通俗的で、ジェンダーフリーやポリティカルコレクトの原則を無視した四流小説、いえ、小説とすら呼べない第二階梯（悪霊クラス霊位階）チャネリング毒電波掲示板に垂れ流される初 冪、アルデバランの邪悪なる精神生命体が地球人類を墮落させ精神汚染による地球侵略を目論んで発信した淫夢邪念波放送に登場する人物造詣もなにもされていない女... ただ男を喜ばすため、愚劣な男どもの都合がいいように

行動するように、餌食になるために、慰みモノになるためだけに合成された馬鹿女と同じじゃないの」

「これじゃ、まるで... これじゃ、まるで...」

そこから先の言葉を言うことに激しい抵抗があるのか、アリスは言葉を途切れさせる。

それを継ぐかの様に上海人形が言った。

「まるで、自分をレイプした相手を好きになる馬鹿女みたい。キャハハハハ」

グシャッ

上海人形の頭部が踏みつけられ、潰れる音がアリスの工房に響き渡る。

「アリスは魔理沙がだぁ～い好き」

「おだまりなさい」

「アリスは魔理沙にかまってほしい」

「そうよ、その通りよ、だからもうやめて」

「アリスは魔理沙に自分だけを見てほしい」

「そうよ、私は馬鹿な女よ」

「アリスは魔理沙にレイプされたがっている」

「嫌！もうやめて！！」

「アリスは魔理沙にずっと自分のそばにいてほしい」

「魔理沙、私を助けて」

頭部がめっちゃめっちゃに潰れた上海人形が、いまだにしゃべっているのだろうか？

違う！！

全ての言葉がアリスの口から発せられていた。

上海人形の甲高い声も、アリスの口から発せられているのだ。

「アリスは魔理沙がだぁ～い好き」

「おだまりなさい」

「アリスは魔理沙にかまってほしい」

「そうよ、その通りよ、だからもうやめて」

「アリスは魔理沙に自分だけを見てほしい」

「そうよ、私は馬鹿な女よ」

「アリスは魔理沙にレイプされたがっている」

「嫌！もうやめて！！」

「アリスは魔理沙にずっと自分のそばにいてほしい」

「魔理沙、私を助けて」

・
・
・

アリスは一人でぶつぶつと腹話術による一人芝居を続けながら天井を見上げ、エーンエーンと子供っぽい声を張り上げて泣き出した。

アリスの目からは大粒の真珠のような涙が零れ落ち続けた。

この涙が全て真珠なら、アリスの工房は遠からず真珠で埋め尽くされることだろう。

しかし！彼女の顔をよくみると、ニタニタと哄っている。

天井を見上げ涙を流し続ける彼女の目、まるで死んだばかりの死体のように瞳孔がぼっかりと奈落のように開いたラムネ瓶のビー玉のような青い目には、明らかな狂気の光が宿っていた。その姿は古代ローマ帝国で火炙りの刑に処せられながらも信仰を守り抜き、法悦に身を焦がして死んでいく修道女の姿のように神々しくすらあった。

「魔理沙魔理沙魔理沙魔理沙魔理沙魔理沙魔理沙魔理沙魔理沙魔理沙魔理沙魔理沙...」

「会いたい会いたい愛したい、苦しい苦しい狂おしいいいい」

「あああああ、私をこんな気持ちにさせる魔理沙を許さない」

「魔理沙を殺してあげる」

「可愛い魔理沙、素敵なお魔理沙、昔の私に、遠い昔の私にそっくりな、キラキラした魔理沙をいつまでも私のそばに置いておきたいいいいい」

「でも魔理沙は逃げる、どんどん高みに昇っていく、光速で私の手の届かないところへ行ってしまおう。ねたましい。どうして私は憑いて逃げないの？もう、私の才能は限界なの？悔しい... 悔し過ぎるうううう」

「魔理沙を人形にしてあげる、魔理沙の今の姿を記録し、固定し、保存してあげるうううううう」

「うケケケケケケケケケケケケケケケケ」

暗い舞台の中、スポットライトを浴び、甲高い声で台詞を喋るアリスの姿は、30代半ばを過ぎたにもかかわらず、若作りをして17歳の少女を演じようとするいつまでも目の出ないアンゲラ劇団の女優のように、老けて薄汚れ、芝居じみて見えた。

そして、なぜか上海人形の頭が潰れた床の上には、赤黒い粘液のようなものが滲んでいた。

(ところで、自分をレイプした相手を好きになる女など、居るのだろうか？ そのような文章表現は女性蔑視ではないのか？ 確かにそうかもしれない。しかし、考えて欲しいのだが、新型・無差別・残虐・大量殺戮爆弾を2発も落とされ、被害に遭った人間は体中ジクジクに焼け爛れ、熱いピザの上のモzzarellaチーズのように融けた皮膚が指先から垂れ下がったまま悶え死ぬような悲惨な目に遭わされたと云うのに、爆弾を落とした国の言いなりになるばかりか、爆弾を落とした国を大好きになっちゃうような馬鹿な国や大馬鹿な政府や薄ら馬鹿な国民だって、どこかに居るかもしれないのだ。あっはっは。「アリスは魔理沙が大ぁ~い好き！」)

第二章 『畏』 ～さそり座のアリス～

アリスはどうやって魔理沙を畏に嵌めるか考えた。



(かかったなあ～！！)

「新しい、珍しい魔導書を入手した」

とかなんとか言っていて、物で釣れば魔理沙はアリスの家までは来るだろう。

これまで、魔理沙が物に釣られてアリスの家まで来たことはあったのだ。

アリスは思う

「... 魔理沙、ひどい人。神社や図書館には誘われなくても行くくせに、私のところにはいちいち物で釣らないと来てくれないのね...」

しかし、その後どうやって眠らせるか、どうやって薬を飲ませるか...

魔理沙は万年欠食児であり喰い意地が張っている。お茶やお菓子里に薬を仕込めば簡単に騙せそうにも思えるが、変に勘のいいところもある。万が一ばれたらただでは済まないだろう。

相手を油断させるには、自分も飲み喰いして見せるのが早道だ。だが、どうやって？ 使うのは、一滴で象もイチコロの強力な睡眠薬であり、わずかでも自分の口に入れるわけにはいかない。

自分と魔理沙、それぞれに一個ずつ出したお菓子の一方に仕込むとバレる可能性がある。

取り替えようなどと言い出されたら終わりだ。

そこでアリスは一計を案じた。

人間は、自分で選んだものに対してはほとんど警戒しない。それを利用した単純なトリック。

(「自分は自分を信じていない」「自分ほど信用にならない存在は無い」と言い切る人間ですらも、自分を信じないと言い切る自分の理性... 批判精神は信じているものである。

むしろ、自己批判のできる自分は頭がいい(病識がある自分は狂って居ない)と心の奥では思っている分タチが悪いとも云える... そもそも、「狂った人間には病識が無い」だから、「自分には病識があるので、自分は狂っていない」という理論自体が矛盾しているのだ。本当に正常な人間が「自分は狂っているかもしれない」などと本気で考えるだろうか? 「自己批判のできる自分は頭がいい」(病識があるから自分は狂っていない)と考えている自分に対して「自分には病識があるから狂っていないと思込むこと自体自分が狂っている証拠なのかもしれない」という自己批判ができるので自分は狂っていない」といえるかどうかを繰り返し考えていると、再帰処理のし過ぎで頭がスタックオーバーフローを起こして再帰不能に陥ってしまう。たとえば、自己判定機能のついたシステムがあったとして、絶えず自分が狂っているかもしれないという意味の黄色ランプが灯りっぱなしだったとしたら、そんなシステムを信用して使おうとする人間など居るだろうか? 完全な自己批判が不可能だということは、チューリングやゲーデルによって証明済みだというのに...(きっと黄色ランプが消えたときが狂ったときなんですよ! お前の心のランプは何色だ? コンディション・グリーンでGo! Go! Go !!!)

ま、再帰のココロは解脱のココロ、ここで終わりだと感じたら自分の代で打ち止めにするのも仏心というものですよ。割り込み話が長すぎましたね、ふう)

魔理沙は紅茶を飲むとき、お茶一杯に対し、角砂糖なら3個は入れる。

そして、少なくとも2杯は紅茶を飲んでいく。

アリスはいつも紅茶一杯に対して角砂糖は一個だ。

角砂糖はレース模様の飾り紙を敷いた藤細工のバスケットに入れて出す。

角砂糖に、一滴で象もイチコロの眠り薬をたらしておくのだ。

ただし、つけた本人しか気づかないような微かなしるしをつけた6つの角砂糖にだけは薬を仕込まないでよく。

当然、アリスは薬の入っていない角砂糖を選びつける。

魔理沙が偶然薬の入っていない角砂糖のみを選び続けることに成功したとしても、2杯目には必ず睡眠薬入りの角砂糖を引き当てることになる。なにかイレギュラーなことが起きて計画がバレそうになっても、そのときは手が滑ったふりをしてポットを角砂糖の上に倒すなりして、角砂糖を全て片付けてしまえばいい... そこまで考えるとアリスは早速準備をはじめた。

角砂糖に薬をたらすと、その部分が溶けて凹んでしまい、その対策に手間取ったりもしたが、なんとか2日で準備を終わらせた。

そして今日、これから起こることを何も知らない(はずの)魔理沙がこのこと葱を背負った鴨のようにアリスの家にやってきてしまったのである。

魔理沙がアリスの家の入り口を元気一杯に勢い良く開くと、何十年も前から空気が滞っていたようなアリスの家の中に風が流れた。

一瞬、流れてくる杜の匂い、朽ち果てていく樹々の匂い、黴の匂い、茸の匂い、湿った菌類の匂い...

茸や黴のような菌類は、人形の大敵である。黴は人形を朽ち果てさせる。木の人形はもちろん、ドールヘアをボロボロにし、半永久ともいえるビスクドールの釉薬でコーティングされたガラス質の滑らかな肌すらも、黴の醸し出す腐食物質によって少しずつ溶かされ、浴室に置かれた鏡が湿気を好む黴によっていつのまにか不透明になってしまうように色艶を失わせてしまう。アリスは茸の、黴の、菌類の匂いを嫌悪していた。

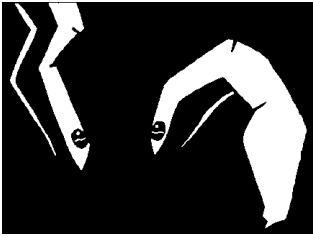
アリスの家の壁一面には柵がしつらえられており、そこには人形が所狭しと、まるで難易度の高いクレーンゲームの景品のごとくギチギチに詰め込まれている。人形の

種類も、上海・蓬莱・フランス・オランダ・チベット・京都・ロンドン・ロシアン・オルレアン ...まるで人形の博物館のように古今東西の人形が揃っている。

あるいは、婚期を逸したココロとカラダのさみしいOLが、ファンシーショップで買い漁ったかわいらしい縫い包みを、これまたかわいらしいパステルカラーで丸っこい自家用車のリアウインドウにこれ見よがしに飾る姿を彷彿とさせる。

“きてい”に“みっきー”に“すぬちゃん”... おお脳(懊惱/OH!NO!)がふぁんしーになるう。縫い包みと糸吉女昏・ｸｰﾝ・ｺﾞｺﾞｺするつもりなのかぁ!? んッ!? (筆者は誰に喧嘩を売っているのでしょうか??? わはははは、ひでえ)

しかし、魔理沙は気づかなかったのだろうか? 風に吹かれた木々の梢がざわめくように、人形たちがひそひそと、ざわざわと、まるで琵琶法師が奏する平家物語の壇ノ浦の一場に嗚咽する亡霊達のようにざわめいたのを。



... こんなトコロに耳だけがぁ ...

人形たちのざわめきは、不幸な犠牲者のその後の運命を嘆くすすり泣きのようでもあり、自分たちの仲間が増えることに対する喜悦の歓声のようでもあったのさ。

やってきた魔理沙は開口一番言った。

「珍しい魔導書が手に入ったんだって? 早く見せろ!」

アリスは「ガストロノミコン ~究極の美食の書~」という題名が金文字で掘り込まれた重厚な本を魔理沙に手渡す。

つまらないところで計画がばれるのも嫌なので、ちゃんとそれらしい本を用意して置くあたり、アリスの几帳面さがよく表れている。

魔理沙は奪うように本を手にとると早速目次から読み始める。

「第一章 食とはなにか ~食餌行為の再定義~」

「第二章 美味とはなにか ~人は何を美味と感じるか~」

- 「第三章 飽食の時代の美食 ～完全栄養食について～」
- 「第四章 生物の複製法 ～植物から高等動物まで その具体的手法～」
- 「第五章 i P S細胞 ～人間の部分複製に関わる倫理規定と法解釈～」
- 「第六章 ニューギニア奥地の風土病にみる異常プリオンに関するケーススタディ」
- 「第七章 クロイツフェルト・ヤコブ病 ～発症のメカニズムと対処法～」
- 「第八章 来るべき宇宙時代に向けて ～多世代恒星間移民船内での人体の有効利用～」

・
・
・

アリスが、「必ずしも魔導書とはいえない内容だけれど、魔理沙の研究には役に立つのじゃないかしら」といった言葉も耳に入らないほど、魔理沙は本に没入してしまっている。

ふーん、なるほど...

- 「極地や砂漠地帯など、農耕が不可能な地域では動物の血を生で飲んだり、草食動物の腸の内容物（軟便）を食す行為が美食とされているが、それはその地域で暮らす人間が慢性的なビタミン不足であり、それらを食べないと死んでしまうからだ」
- 「ウサギは自分の軟便を食すが、その際『軟便を食べないと消化不良で死んでしまう』などと考えてはいるまい、ウサギはただ『自分の軟便を美味しい』と思って食べているのである」
- 「食の美味・不味は肉体の維持と不可分である」
- 「食とは、対象を分子レベルまで分解し、自分の肉体として再構築する行為だ」
- 「分解～再構築に必要なエネルギーが最小となる食品が理想の食品といえる」
- 「栄養に偏りのない人間にとって最高の美食とは、人間の持つ栄養を全て過不足なく備えた食品である」

・
・
・

アリスが「お茶、淹れるけど、飲むでしょ？」と聞いても魔理沙は上の空である。

アリスは「こんなことなら心配して準備に手間をかけるんじゃないかな...」と思い始めたが、油断は禁物、ここで手を抜いて失敗するわけにはいかない。

アリスは記憶を手繰る。

「こんなとき、今までだったらどうしていたかしら...」

なるべくいつもどおり、警戒されないように事を運ばなければならない。

「お茶、ここに置くわよ、角砂糖は3個だったわよね」

「本に夢中になって、こぼさないでね」

と言いながら、アリスは緊張した面持ちで薬を含んだ角砂糖をティーカップに入れてかき混ぜる。

スプーンがカップの内面にぶつかるカチャカチャという音が、異様に大きく耳障りに感じられる。

アリスは「こんなことが以前にもあったわよね、なんだか遠い昔の、幸せな記憶みたいね...」と思い始めていた。そしてこれから自分がしようとしていることを考えるとアリスの心はチクチクと痛んだ。

魔理沙が本を読みながらティーカップに手を伸ばし、引き寄せて、口元に運び、今まさに口をつけようとした瞬間、それまで大人しくしていた上海人形が壊れた機械のように突然ガチャガチャと全身を震わせた。

テーブルには椅子が三脚添えられていて、魔理沙とアリスが向き合って座る配置になっているが、もう一脚に上海人形がずっと最初から座っていたのである。その上海人形が、「魔理沙、それを飲んじゃだめだ」と言わんばかりに手脚をばたばたさせはじめたのだ。

魔理沙は上海人形に気づくときょっとして言った

「上海、どうしたんだ？ 頭が包帯だらけじゃないか!？」

(アリスは、睡眠薬の準備と平行して、ほとんど徹夜で上海人形を修復したのである)

アリスは魔理沙の死角から上海人形を般若のような形相で睨み付けた。

その睨みは、その眼に狂気を宿した月のウサギすらも怯むのではないかと思えるほどに強烈な一瞥だった。

【宣伝】



月の殺人毒電波ウサギさん Tシャツ&マグカップ ... お譲りします、貴方に。

極東神殿騎士団 <http://luminel.pro.tok2.com/>

そのすさまじい眼光に射貫かれた上海人形は死んだかのようにぱったりと動くのをやめ、力なく手脚と首を重力のおもむくままだらりと垂らした。

「階段から落ちてぶつけて怪我をしたのよ、なんでもないわ」とアリスは言い放ち、目の合った魔理沙に対して、ゾッとするほど優しい菩薩のような微笑 ... 仏像のような、あるいはトゥット・アंक・アメンの黄金のミイラマスクのようなアルカイックスマイルを向けた。(外面似菩薩、内心如夜叉/げめんじぼさつ、ねしんによやしゅ)

魔理沙は言った

「今日のアリス、なんか変じゃないか？」

アリスは、自分の計画がバレたのではないかと内心ギクリとしたが、半ばどうに

もなれという気持ちで立ったまま見下ろすように、椅子に座った魔理沙の目を見据えて言った。

「それより、お茶はどうかしら」

言ってしまうからアリスはしまったと思った。これでは魔理沙の意識をお茶に集中させてしまうことになる。味やおいの微妙な違いに気づかれてしまうかもしれない。

(嘘をつくとき、男は目を逸らすけれど、女はじっと見つめるそうである... 愛し合っているときとは逆なのかしら？ 女は愛し合うときみんな嘘つきになるのかしら？ 女は愛するが故に嘘をつくのかしら？ ...どうだ・んッ！ 下品に哲学的だろ！？ んッ！？)

アリスは思った。

魔理沙は、私の計画に気づいたら怒るかしら？ 殴るかしら？

どうせ私を殴るなら、死ぬまで殴ってほしいのに...

貴女が、他の誰か... 私以外の誰かのところに行くのをもう見たくないの、私以外の誰かと話すのを聞きたくないの、あの日あなたにメチャメチャにされてから、私の頭の中の歯車は狂ってしまったの、完全に壊れるまで魔理沙に遊んで欲しいの、貴女の忘れられない思い出になりたいの、貴女の人生のかけらになりたいの、私は貴女のミルク飲み人形になりたいの、貴女が私を卒業して、私を必要の無い存在だと思って、私を誰かにお下がりに出して、お下がりなんてイヤだって泣かれるなんて耐えられないの。私をめちゃめちゃにして壊して欲しいの、私はあの日以来魔理沙に壊されることを待ちつづけているお人形になってしまったのおおお。

魔理沙はアリスの尋常ならざる雰囲気呑まれたのか、アリスを見据えながら紅茶を一気に飲み干した。

飲み終わっても魔理沙はアリスと見つめ合っていた、アリスは薬の入ったお茶を飲んだ魔理沙から目を離せなくなってしまい、魔理沙は自分を意味ありげに見つめ続けるアリスから目が離せなくなってしまったのだ。

いったいどれくらい時間が経ったろうか、1分と経っていないはずなのに、永遠とも思える時間の後に魔理沙の上半身が椅子に座ったまま大きく左右にぐらりぐらりと揺れだした。本人は上半身を垂直に保とうとするのに、見えない糸・操り糸によって一方に引っ張られ、それを立て直そうとすると垂直を通り過ぎて反対側に傾く。それを繰り返すうちにまるで回転数が落ちてきた独楽のようにますます振れ幅が大きくなり椅子に座っていることすら難しくなって、最後は糸の切れた操り人形のように床にだらしなく倒れこんでしまった。

魔理沙は、飼い主に首を締められ殺されかけている愛玩動物のような目でアリスを睨むと言った

「裏切ったのか、アリス... 信じていたのに...」

アリスの心が、ひと際チクチクと痛んだ。

とろとろと苦い高級チョコレートのような勝利と復讐の陶酔と甘く後を引く背徳的な罪悪感。

薬の魔力に抗い、眠るまい・目をつぶるまいとして、白目をむいた状態で魔理沙は深い眠りに堕ちていく。

それを眺めながら、アリスは一人つぶやいた

「裏切りだなんて、人聞きが悪いわねえ、コロコロと転がっていくからコロコロというのよ、一箇所に留まっていたらそれこそ病気でしょ」

「それに、今までずっと私を裏切り続けて来たのは貴女」

「私から全てを奪っておきながら、私のことを何も見ていなかった貴女」

「私の心を奪っておきながら、私の心を知ろうともしなかった貴女」

「釣った魚にエサはいらないなんて、油断していた貴女」

「貴女は、水槽の猛魚・鳥籠の猛禽・檻の中の猛獣を甘く見て、ノコノコと水槽・鳥籠・檻の中に自分から嵌まり込み、その軟らかく無防備で、甘くてしょっぱくて甘酸っぱい、官能小説にありがちな貴女の体を食いちぎられ喰べられてしまうの」

「貴女が悪いのよ!!!」

魔理沙、お休み。

お休み魔理沙、よい夢を。

そっと目を閉じて、お休みなさい...ぐっすりお休み、眠り姫。

(永遠の「一回休み」よ... ひっひっひ)

「魔理沙、やっと貴女を捕まえた。これから貴女を私だけのお人形...可愛い可愛い縫い包み、『人間剥製』にしてあげるわはははh。

...アリスは、白雪姫から世界一の美女のタイトルの奪還した直後の王妃のようにけたたましく笑った。いひひひひひひひひひひ(藁)

私をいいようにあしらって、いつまでも自分の思い通りになると思っていたタワケな魔理沙ちゃん。

その私に騙された間抜けな魔理沙ちゃん。

今は気を失って虚気(ウツケ)な魔理沙ちゃん。

そして、もうすぐ内臓を抜かれて腑抜け(フヌケ)な魔理沙ちゃんになってしまうのよほほほほほほほほお~ッ!! (タワケな魔理沙ちゃん...)

アリスはそういいながら、バレリーナかスケーターのようにつま先立ちでクルクルと回転し、ピョンピョンと部屋中を飛び跳ねた。おおっと! トリプルアクセル!! 続いてダブルルッツ!! さらにッ、さらにッ、禁じ手の、掟破りの縦系演技、ムーンサルト(月面宙返り)だぁッ!! そしてッ有り余る推力重量比を生かしたテイルスライド...いや違う! これはプラグジョフコブラにフックだぁッ!! ブクレシュティの白い妖星、アリス・マーガトロイド、得点は、なんと 10.00 ッ!! 眼福ですッ!! スポーツ解説者生活 25 年、これほどの演技をッ、肉眼でッ、目の当たりに出来るなどッ、信じられません!! 向こう正面の鷲谷親方、今の演技をどうぞ覧になりましたか??

「いやぁ、もう何も言うことはありません。メリケン帝国のラブトルはもっとすごい演技が出来て、さらに隠密性能が高いといわれていますが、実際に見てみないとほんとにもいえませんねえ。今現在目に来る中では最高の演技だと素直に感嘆する以外にありませんよ、通常このテの演技をするためには長い助走と溜めが必要なんですけど、ほとんど助走なしで技を連続して繰り出していますよね、VTR のこのシーンを見てもらうとわかるんですが、ダブルルッツからムーンサルトに至る流れに、一

瞬の間もないでしょう？ これは余剰推力が大きいことの証拠です。それと、演技開始から終了まで、速度は120ノットからほぼゼロまで落ちていますが、高度は50フィートと落ちていないように見受けられます。立ち合いの際のすさまじい脚力から発せられる強靱なバネによる踏み込み、明らかに失速状態であるにもかかわらずにコントロールを失わない踏ん張り、そして、しぶとく飛行領域に残る粘り腰（「粘り腰」...なんてインビな響きだろう）。絶対領域が見えそうで見えないトコロもポイント高いですねえ。ああ、アリスに蹴られてみたい、放送席からも、テレビからも見えない絶対領域が、蹴られる寸前に、蹴られる人間にだけ瞬間的に見える...いわゆる一つのアリス・キック、彼女が一部で“蹴リス”と呼ばれるのがわかる気がします。うひひひひ」

おおっと、これはいけません、向こう正面の鷲谷親方が鼻血を流しています、かなりの出血量のようにです。いったんここで放送を中断させていただきます。

以上、アリス・マーガトロイドの演技について、放送席からお送りしましたッ。
（今の体操競技の採点方法は10点満点じゃないのは知ってるが、さ、もともとわかりにくかったのが、ますますワカシようになっちゃったよね）

（そして、アリスの独白が続く）

タワケでマヌケでウツケでフヌケな魔理沙ちゃん。うふふふふふふふふ、うひゃひゃひゃひゃ！！

普段あまり感情を表に現さないアリスが声を発して嘲った。嘲い過ぎて呼吸困難に陥ったのか、嘲い終わった後もしばらく「ハハハ」と呼吸を整え、一呼吸置いてからまた嘲い、一通り嘲い飽きてから、ずい、と魔理沙に迫る。

魔理沙は先ほどからイビキをかいているが、だんだんイビキの音が大きくなっていくようだ。

睡眠薬で自殺を図った人間が、余りにも大きなイビキをかいて通報され一命を取り留めるということがよくあるが、魔理沙がイビキをかくのも無理はない、象もイチコロの睡眠薬を盛られたのだから。

ぶごーっ、ぶごーっ、ぶごーっ、ぶごーっ！

アリスは微笑む

「うふふ、魔理沙ったら、まるで発情したメスブタみたいな声で鳴くのね」
(そんなコト言われたってなあ、魔理沙だもんなあ、ぶいぶいいうよなあ...ぶいぶい!!)

「そうよ、貴女雌豚だったのね」

「どうりで意地汚いと思ったわ」

「でも、可愛いわ、可愛いわ、可愛いわ、食べちゃいたいくらい可愛いわ」

「でもでも、我慢・我慢、食べちゃったら縫い包みを作れなくなっちゃうわ」

「それにしても、誰の夢を見ているのかしら、私の夢を見て私に発情してくれてるなら嬉しいけど、他の相手なら許せないわねえ」

とりあえず、外から覗かれないようにカーテンを閉め、魔理沙のトレードマークの帽子を手にとってアリスは魔理沙を抱えあげる。

魔理沙の頭を自分の左胸に押し付けるようにして「お姫様抱っこ」をしようとするが、それをするには魔理沙は大きすぎて頭が安定しない。

「ぶごぶご」とイビキをかいている魔理沙の口からタラタラと生暖かく、さらさらとしたヨダレがこぼれ落ち、アリスの左胸をじっとりと濡らしていくが、なぜかアリスはそれを嬉しそうに眺める。

魔理沙を抱えたアリスが、人形のびっしり詰まった棚の前で凜とした声で呪文(パワード)を唱える。

「ギニョール、ギニョル、ニンギョニル。

我、神の猿たらんと欲する魔導師なり、

神が泥を捏ねてつくりし神の似姿に似せて、

我、神の似姿のさらなる似姿を作らんと欲するものなり、

主よ、願わくば、我に神の似姿の真なる名を示したまえ」

すると、棚が左右に開き、地下への隠し通路が現れる。

アリスがその中へ脚を踏み入れると柵は何事も無かったかのように元通りに閉じてしまう。

地下への通路は人が両手をいっぱい広げれば両方の壁に手をつける程度に狭い。左右が切り立って石壁のようになった階段を、アリスは魔理沙を抱え、ゆっくりと降りていく。天井がやたらと高い石作りの通路に、一歩一歩脚を踏み外さないように歩くアリスの足音が響く。

小さな体の魔理沙に比べて、頭一つ分は背が高い、コーカソイド（ヨーロッパ白人）特有の、四肢が長く背が高い体格をしたアリスは、一見して細身で華奢、見ようによってはひ弱にも見えるが、魔理沙を抱いたまま息を切らすでもなく、よろめくことも無く体重移動の少ない無駄のない動きで階段を降りていく。その姿からは自分の体重ほどもある獲物を啜え、すんなりと伸びた体を鞭のようにしならせて優雅に・誇らしげに歩くネコ科の大型肉食獣にも似たたたかさが感じられる。



アリスは「とらとらさん」というよりは...



「ためたぬさん」じゃないかと思う。何かを訴えかけるような瞳がキュートなたぬプリちゃん。

わき道のない階段をまっすぐ十数メートルも下ると、高さ5メートル近くはあるとかという青銅と思しき金属製の重厚な扉のある玄関前広場に突き当たる。門には苦悩する人、叫ぶ人、逆さに落ちていく人などの姿が彫刻されており、ロダンの「地獄の門」に似ている。（「この門くぐりたる者、全ての希望を棄てよ」）

観音開きの青銅の扉が、ゆっくりとゴリゴリというような重苦しい音を発ててひとりでに開いていく。

開いた扉の向こう、暗い中に、何かがいる。赤く光る目が輝度をじわりと上げる…奥へと通じる通路の左右に、門番を勤める偶像が配置されているのだ。

身長3メートル以上の巨人様の漆黒の体、エメラルドやルビーやサファイアが象嵌された金の腕輪に金の肩飾り、胸飾り、腰飾りを身にまとい、ラピスラズリ（群青）のアイシャドーが施された目と口の周りを金で縁取ったその威容。向かって左側に黒い山犬の頭を持つアヌビス神、右側にワニの頭をしたセベク神が今まさに招かれざる侵入者をその手で握った金の槍の穂先で貫かんとする姿が見る者を圧倒する。

よほど根性の座った盗賊でも、この人身獣頭の2体の門番を見れば恐れをなすに違いない。

アリスがその通路に差し掛かると、二つの偶像の目がギラギラと純粋に赤い拡散レーザー光のように怪しく光りだす。

二つの偶像の中からは、殺人蜂の羽音のような、ブーンという耳障りで、明らかに

敵意のこもった音が響きだす。

ただし、アリスは招かれざる侵入者ではない。それを証明するための呪文をアリスは唱えはじめる。

「汝、冥界の案内人アヌビスよ、
汝、ナイルの支配者セベクよ、
古の契約に基づき、汝らの盟主アメン・ラーの名のもとに命ずる。
速やかに汝らが守りし冥府の門を開け放ち、我が前に道を示せ」

アリスが呪文を唱え終わると、どこからとも無く声が聞こえた。

「ばすわーどちえっくくりあ」
「声紋ばたーんちえっくくりあ」
「虹彩ばたーんちえっくくりあ」
「あすとらるばたーんちえっくくりあ」
「ばいおめとりくす認証完了」
「あすとらるめとりくす認証完了」

・
・
・

それは、男性の声でもなく、女性の声でもない、人間ならば当然あるはずの呼吸の息遣いが感じられず、それでいて頭の中に直接響くかのように一音一々はっきり耳に・心に刻み込まれる…まるで最後の審判の日に熾天使イスラフィールが全人類への最後通告として吹き鳴らす天界の吹奏楽のような声だった。

怪しく光っていた門番たちの目の光と耳障りな羽音が徐々に弱まり、眼前の扉が開いた。

今度の扉は先ほどの重厚な扉よりずっと小さかった。どこか手術室や霊安室の入り口

を思わせるその扉は、普通の人間ならば入ることがためられる雰囲気醸し出している。

そこがアリスの最終目的地らしかった。

そして、アリスが足を踏み入れたその部屋には何体もの人形が居た。それが、人形と呼べる物ならば...

第三章 『黒と影』

その部屋に入ると、クレゾールやアルコールや樟脳やホルマリンが混じったような、消毒液や防腐剤のような薬臭い匂いがした。

アリスが脚を踏み入れたその部屋を仮に「玄室」と呼ぼう。

そこは小さな体育館並みの広さがあったが、天井はそれほど高くは無い。2.5m といったところか。面積の広さの割に天井が低いので、頭を押し付けられるような異様な圧迫感がある。

「玄室」だけあって、壁や天井は暗い色をしている。
床も、暗めの色の陶製のタイルが敷き詰められている。

部屋の中央には無影灯がしつらえられており、そこだけがやたらと明るい。
そして、無影灯の直下には純白のシーツで覆われたベッド... というより、手術台が置かれている。

そう、ここは手術室でもあるのだ。

そして、部屋の周囲、手術台から十分に離れた場所にたくさんの人形たちが陳列されている。

人形には、男も女もいる、歳は概ね12、3歳くらいから、年上のもので18、9歳くらいまでだろうか。肌の色は、透けるような白い肌から、漆黒といってもいいくらいの肌まで。髪の色は白金色から金、赤銅を経て、黒髪まで。髪質も、直毛から緩いウェーブ、きついウェーブを経て完全な縮れ毛まで。目の色も、ターコイズ、サファイア、エメラルド、赤瑪瑙から黒瑪瑙まで... ルビーの目をして白い肌をした人形はアルビノだろうか？

ここにはあらゆる人種・民族の少年少女達の等身大の人形が陳列されているのだ。

人形同士の共通点を無理に探すとすれば、写実的であることと、どの人種・民族の子供も、その人種なり民族なりの美しさを備えており、決して醜い姿のものや、体に

見てわかるような不具合がないことくらいである。

思い通りの服装をした子供たちの人形がそれぞれの魅力を最大限にアピールするようなポーズで飾ってある姿は、人種と民族の万国博覧会のようでもあり、平和な多民族国家の、豊かな質を誇る百貨店の子供服売り場に飾られたマネキン人形のようでもあった。

ここに飾られている人形は、地上の工房に飾られている人形とはかなり趣が違っている。

地上のアリスの工房に飾られている人形たちは、どれも、一見ただけで人形とわかるような3頭身や4頭身の造形がされており、身長も実際の人間よりずっと低いが、この玄室に飾られている人形たちは、どれも写実的で、人間と見分けがつかないくらいだ。いや、よく近づいてみると、うっすらと産毛まで生えている…

既に賢明な読者諸氏は気づいていることとは思うが、ここはアリスのアリスによるアリスのための人間剥製製造工場であると同時に、アリスを中心とした地底獣国外人魔境にして人間剥製展示室なのだった！！

(ここはアリスしか知らない秘密の地下室『人形の穴』。魔理沙、あなたは人形よ！人形になるのよ！！)

人間剥製製造(殺人・死体損壊)は、アリスにとっては日常的な一種の気晴らしであり、自身の犯行による被害者家族の困惑及び、社会の混乱を眺めて悦に入るなど、**ゲーム**感覚で犯行に及んでいる、大変身勝手な空前絶後の犯行であり、人間の尊厳を踏みにじるその態度には情状酌量の余地が無い。

自己中心的で他人の痛みを顧みない著しく偏った人格傾向の発露！！

「手術の前には人道的配慮で全身麻酔をかけてるもの」(痛くないわ！)

「私の痛感神経には、リモート・センサーはついてないわ！」(感じないわ！)

自身の孤独癖のために社会的・精神的に孤立感を募らせた挙句、行き詰まって自暴自棄となり、以前から空想していた連続殺人で自分と同じ苦しみを多くの人間に味わわせてやろうと考えた。

幼い子供であれば抵抗されずに誘拐できると考え、それを決意した。

環境や教育、精神医療で矯正され得た可能性はゼロとはいえないものの、ほとんど僥倖に等しい。

罪のない子供たちを襲って、反省のそぶりも見せない。

「罪のない人間なんて、居ないわ！！」

「罪などなくとも人は死ぬ、それが定めというものよ！！」

異常な犯行の矛先はどこに向かうかわからない。(あん ああん あん ああん あん！)

犯人が社会復帰した場合、同様な犯行を繰り返さないという保証はない。

妄想性、非社会性及び情緒不安定性の複合的人格障害者ないしは他者に対して冷淡、残忍、冷酷な情勢欠如を中核とする人格障害者であって、しかも、他罰性、自己中心性、攻撃性、計画性が顕著で、その人格障害の程度(人格の偏りの程度)は非常に大きいと認められる。

要するに、被告は、被告自身の生活態度の当然の帰結ともいうべき精神的、社会的行き詰まりに理不尽な怒りを募らせ、いささかも反省自戒することなく、その責任をすべて社会に転嫁し、自分の思いどおりに事が運ばないことの八つ当たりとして本件に及んだものであり、どのように考えても、酌量すべき点など毫(ごう)も存在しないというほかない。

結果の重大性、犯行の残虐性、遺族の被害感情、社会的影響、犯行動機、犯行後の情状など本件のありとあらゆる事情が、いずれも、被告の刑事責任がこの上なく重大であることを示しており、被告に科すべき刑は死刑以外にはあり得ない。

「死ぬことにはビビっていないわ！」

死刑に犯罪抑止効果があるかどうかは意見の分かれるところだが、死刑になった犯罪者には再犯の危険がない。

「私は反省しない、私にはもう未来がないから反省しても意味がない！！」

「事故や災害や戦争で大勢死ぬのと、私に殺されるのと何が違うのよ！？」

「私は自己責任で人を殺している... 全ては私の罪で、罪にはいつか罰が下されるだろうけど(私、粛清されちゃう! ああ、うっとり)... 民主的な選挙で選ばれた政治家が始めた戦争で大勢死んでも、誰も責任を取ろうとしないじゃない... 連帯責任は無責任じゃない！」

自機以外は全部『敵』

ゲームのし過ぎによって、ゲームと現実の区別がなくなってきた残酷なゲーム脳

ゲーマアに善人はいない！ 絶えず他人を打ち負かすト・出し抜くトしか考えていないゲーマアが善人である筈が無い！！ その中でも特に「シュウタア」は攻撃性・衝動性が高く、破壊的かつ直情径行で最悪に決まっている！！ い~や、もう決まったッ！！！！

(お前なんか、決め付けてやる！ 決め付けてやるッ！！)

さらにッ！ 同人誌即売会など、人間の屑の逝く処ですッ！！ 恥を知りなさいッ！！ (ぎゃはははははははははは)

(幻想郷は弱肉強食。『人生の勝利者』こそが正義。『負け犬』には人権など無い、ウィナー・テイクス・オール！！究極の実力社会にして格差社会！！実力主義に反対するのは、お前に実力が無いからだろ、んッ！？これこそがグローバルスタンダード！！肅清する側が恒に正しいのだッ！！イージーモードお？？きもぅい~！！)

将来有望な外見の美しい人間を剥製にしたほうが自己満足がある。

いくら将来が有望で、パパやママや兄弟と仲良く平和に暮らしている「よいこ」でも、私のように頭の狂った妖怪に突然剥製にされちゃうこともあるっていう不条理を分からせてやりたかったッ。一度やり始めたら、止められない。

次にやるなら禁断の自己複製(生殖)能力を持ち、人間になりすまして次々置き換わっていく無差別大量剥製化呪詛人形『ドッペルスナッチ』を使う。その方が数もイケた。

(人類という名の病原菌を、一匹残らずこの地球上から『消毒』するノダ)

だらだら生きていく魅力がもうこの世の中にはなにも無い。人生の幕引きに一人でも多く道連れにしたかった。

自分が被害者なら、謝罪されてもうれしくない。だから謝罪しない。

... アリスよ！ 虫も殺さぬような顔をして、君は一体何人の若い命をその毒牙にかけてきたのか！？

そして、アリスよ！ 君は美少年や美少女たちの、これ以上に無いリアルな人形を使って、夜な夜な着せ替え遊びにうち興じているというのか？？

ああ、なんと耽美でなんとうらやましいことか、(妬ましい、僻ましい、嫉ましいい) そのあまりに優美で高尚な趣味に筆者は眩暈にも似た羨望を禁じ得ないいい！！ (うひひひひ)

魔理沙、危うしッ！！ 危うし、魔理沙ッ！！ このままでは君も遠からず剥製にされてしまうぞぉ～！！ ああ、解剖学の少女魔理沙！！(やめろぉ～ジョッカー！ぶっとばすぞぉ～！！)

(早く魔理沙の、早くひん剥かれた、早く可憐な、早く剥製が、早く見たいひい～)

耽美は悪趣味、悪趣味は耽美。

(余談だが、ゲームでは死んだはずの主人公が何度でも生き返るが、そのことによって子供たちが生命の儚さ、命の尊さを理解できなくなり、それによって凶悪犯罪が増えるという説があるが、どうなのだろうか？ 赤頭巾でも七匹の子山羊でも、原型になった民話では狼に食べられて終わりという話だった。そうやって、悪い人に対する警戒心を子供に植え付けるという効果が期待された。しかし、死にっぱなしでは「残酷」だからと、生き返る話に変えられてしまった。あるいは、食育の一環として、子供たちが飼育した鶏やウサギを屠殺し、解体し、調理するところを子供たちにも見せるべきだ、さらには子供たち自身にそれらを体験させるべきだ... という意見と、そんな残酷なことをさせるべきではない、ウサギに対してしたことを人間にしたら、どんな気分がするだろうハァ... と考える子供が出ないとも限らないじゃないかという意見があるが、どうなんだろう？ おいしそうなウサギちゃんハァ)



おいしそう(?)なウサギちゃん、ハハハ。
(この白ウサギ、そのへんで皮をひん剥こうかしら!?)

第四章 『カノープス瓶』 ~いのちの器~

アリスは魔理沙のカラダを、手術台の上にドサリと置く。

アリスが、誰に聞かせるでもなく言う。

「タワケでマヌケでウツケでフヌケな魔理沙ちゃんシリーズに追加ができたわね」

「マグロな魔理沙ちゃん、うふふ」

「タワケでマヌケでウツケでマグロで、もうすぐフヌケになっちゃう魔理沙ちゃん、
うふふふふふふふふふふ、うひゃひゃひゃひゃh！！」(勝ち誇ったように笑い狂うアリス)

魔理沙ったら、可愛い。魔理沙ったら、美味しそう。まぐるちゃん！

立てば「コシナガ」座れば「キハダ」、泳ぐ姿は「クロマグロ」

「ふふふ、ｸｽｸｽ、ｸｯｸｯｸｸｸ... くるまぐるおおおお~！！」

先ほどまでは无影灯のまぶしい光を反射して、輝くような純白に見えた手術台の上のシートも、よく見るとところどころ鉄の赤さびを水に溶いて垂らしたようなくすんだオレンジ色の染みが滲んでいる。洗いたてであり、死ぬほど清潔なはずなのに染みが消えないシートは、この手術台が何人もの少年少女達の血を吸いつづけてきたことを物語っているようだ。

アリスは無造作に上着を脱ぐと下着の上に直接白衣を羽織り、手術帽をかぶる。

手術用のゴム手袋をはめるが、消毒はしない。

外科医のコスチュームに身を包むのは、返り血や人体から出る分泌物、汚物による汚染を防ぐためであり、クランケの衛生面を考慮してのことではないからだ。

ちなみに、アリスの下着は、わずかにレース模様の装飾はされているものの、全体的にシンプルで白に近い、淡いベージュ色の比較的質素でありふれたものだ。

(ちょっとオバサンくさいといえなくもない)

しかし、動物の体内で一生太陽の光を浴びずに生きる寄生虫のように白くほっそりしてぬめりさえ感じさせるカラダを持つアリスが自分の肌よりやや濃いベージュ色の

下着をびっちり、吸い付いているかのように身に付けている様は、その下着の下に隠された更なる白い肌と、白い肌に囲まれた、おそらくは暖色系の色彩をもつであろう特異点... 絶対領域を連想させ、エロティックな妄想を掻きたてられずにはられないいいいい...

さらに蛇足な描写をすると、アリスの胸はBカップとCカップの間といったところであろうか。決して大きいとはいえないが、少女らしくも左右対称で円錐形と半球形を組み合わせた理想的な造形をしている。あまりにも均整が取れて欠点の見つからない彼女のカラダの造形は、なにやら作り物じみた人工的な美しさを感じさせる。

アリスのブラの中身は想像する以外にないが、このブラで上げ底ということは考えにくいので、ブラの大きさ 胸の外形寸法と考えて問題ないのではないだろうか。

実は、アリスのブラの左カップには魔理沙のヨダレが染み込み、冷えたアリスの左の乳首はブラの中で硬く尖っていたのだが、それはこの話の本筋とは関係ないのでそれについての描写は割愛させていただく。

白衣に着替えたアリスは、おもむろに手術台の脇に置かれたクリップボードを手にとると読み上げた。

「これから、霧雨魔理沙に対する防腐・保存術を行います」

「まず、グリセリン浣腸を行い、腸の内容物を強制的に排泄させ処理します」

「また、必要に応じて尿道にカテーテルを挿入し、尿も排泄させます」

「腸および膀胱の内容物の処理が終わった後、肛門から引っ掻き棒を挿入し、直腸を引っ掛けて脱肛させます」(刺さるよ、刺さるよ... ハァハァ... ぎらぎらした目つきでアリスは「引っ掻き棒」を見つめた)

あたる場合がありますので、絶対に真似しないで下さい)

(「よいこ」はマネしない!!)

(本製品を使用した結果、及びそれによって生じた影響について、当社は一切責任を負いません)

(おとうさん、おかあさん方へ...この物語は成人指定です。お子さまの手のとどかない場所に保管してください)

(警告...何ものにも囚われない記憶の中の子供たちに告ぐ、この物語は毒電波によって創られている)

「消化管以外の内臓は、左わき腹を目立たないように、皮膚の筋目にそって切開し、そこから“哀れ”な『犠牲者』の未だ生暖かく湿ってヌメヌメして、程よく押し潰す力の残る腹腔内にじゅぶじゅぶと手を差し込んで摘出します」(切れるよ、切れるよ、ハァハァ...ぎらぎらした目つきでアリスはメスを見つめた)

(「いいよ・いいよ、ザ・リナ〜ルにいいよ)

「摘出した内臓はそれぞれ、ナトロンの塩で脱脂・防腐処理を施した後、カノープス瓶に封入、保存します」

アリスはどこから取り出したのか、大理石製とおぼしき、人身獣頭の神々の姿を模した瓶を持ち出してうっとり眺め、そこにはいない誰かに見せびらかして自慢するかのごとくに言った。

「内臓とカノープス瓶の対応は以下の通り」

肝臓...人間の頭部を持つアムセト神

肺...ヒヒの頭部を持つハビ神

胃...ジャッカルの頭部を持つドゥアムテフ神

腸...ハヤブサの頭部を持つセベクセヌフ神

ある意味重厚で不気味ではあるが、その使用目的を知らない人間が見たら、子供たちに人気のヒーローもののかたどった子供シャンプーの容器を大型化したように見えるかもしれない。(アムセト神などは、往年のヒーローキャラクターであるジャイアントロボ(ま)シャンプーの容器そのものと言っても過言ではない、ジャイアントロボ

(ま´)がわからないヒトは、まゝ(ま´) アナカリスみたいなモンだと思ってくれい。
カイビットって下位ビットのことだよなあ！？)

アリスは言う

「魔理沙、あなたはなんて幸せ者なのかしら、世界一の人形師の手で、永遠にかわいらしい人形として新たに命を吹き込まれ、その内臓すらも、こんなに本格的なカノーブス瓶に保存してもらえるんだから、ありがたいと思いなさい！」

「ああっ、食べたいけど保存したい！ 保存したいけど食べたい！ そんな矛盾をどうしたらいいの！？ カノーブス瓶に保存する前に、ちょりっと一口食べたいわ！！ 魔理沙のホルモン焼き、魔理沙のモツ鍋、魔理沙のレバ刺し...そして、極めつけは、魔理沙のコブク口。きゃっ、言っちゃった！ あん、恥ずかしい」
そう言うと、アリスは頬を紅潮させ、体をくねらせて身悶えした。

さらにアリスは言う

「古代エジプト人は、脳は鼻水を作るだけの器官と考えて捨てていたそうだけれど、貴女の味噌を捨てるなんてもったいない(もったいない!もったいない!) 貴女の後頭部を輪切りにして、生きたまま皺々(しわしわ)で襲々(ひだひだ)の脳みその谷間をぺろぺろ嘗めてあげるわよ(まさか、いくら貴女でも脳味噌に皺がないなんてことはないわよね) 貴女の脳を舐め舐めすれば、貴女が見ている夢を味わえるかしら?私のことをどう思っているかもわかるかしら?私のことを憎んでるなら、あなたの味噌は苦くて味わい深いし、私のことを愛しているなら甘くて美味しそうだけれど、どうでもいいと思われていたら味気ないでしょうね。(火傷するくらいに熱いか、凍りつくくらいに冷たいのがいいわ。生ぬるかったら、きつと吐き出しちゃう!!) 猿の脳のシャーベットは珍味だそうだけれど、魔理沙の味噌は美味しいかしら?魔理沙の味噌だから、『まりミソ』ね!うふふ。じゃあ、『腑抜け』にするより先に『兜割り』しなきゃいけないわね、でも、魔理沙の脳が鶏の笹身や帆立モリモリみたいに筋肉質だったらどうしましょう、脳筋魔理沙、うふふ」

「内臓の処理は古式ゆかしい方法でやるけど、そこから先は現代的にやってあげるわよ、シリコンゴムとエポキシ樹脂、ウレタンフォームとカーボンファイバーを適宜組み合わせ、各関節がポリキャップで自在に稼動するハイグレードガンニウムか

磁石の威力の球体関節で自在に曲がっておりとあらゆるマニアックな体位が可能で抱き心地がよくて、軟らかさと愛らしい外見を兼ね備えた、リアルドー やキャンディガー も真っ青な、いやらしいいやしいとてつもなくいやらしい着せ替え人形にしてあげちゃうわ」

新設計の関節パーツによるスムーズ且つキチッと決まる可動で、げえむ中のあらゆるシーンを再現。

軟質素材を体内に充填スル事でプロポーションを崩さずに可動域を確保。

2種類の表情パーツと豊富な手首パーツが付属し、ポージングの幅が広がります。付属武器の八卦炉は「スターダストレヴァリエ」「マスタースパーク」「ノンディレクショナルレーザー」と3種類のフォームに換装可能。

大きくたなびくマントは、バトルシーンをよりリアルに演出。着脱可能で、お好みに合わせてお楽しみいただけます。

さまざまなマニアックプレーに対応する可動支柱付き箒型専用台座が同梱。

激しいプレーで生じたほころびにも対応、補修用シリコン剤を添付。

優しくスムーズなプレーを演出する無害かつ衛生的な専用ローション（天然素材使用）が、今なら 500ml 入り 3本サービス中！

オプションとして、使い魔の黒猫（剥製）と箒にぶら下げるラジオを別途販売中。

魔理沙専用プロテインと高枝切りハサミがセットでこのお値段。

電話は今が 0120-xxxx-xxxx

「貴女が見事剥製に上級転職（クラスチェンジ）したら（「おお、魔理沙殿は見事に人間剥製になられましたぞ」... なんてね）毎日だと他の剥製が嫉妬するから、3日に1回くらいは添い寝してあげるわよ、嬉しいでしょ」

さあさ、シリツを始めましょうね... え？シリツって云うのはコワイからヤメロって？じゃ、「しゅじゅちゅ」って云ってあげるわよ、さあ、「しゅじゅちゅ」を始めましょう... うふふ。（アリスは殺る気マンダ）

「しゅじゅちゅ」ってすごいのよ！ 麻酔でぐっすり眠ってる間に、腕が無くなる（ババンバン）脚が無くなる（ババンバン）医学の威力だ更迭ジークなのよ！！

さらには、生えてたモノが無くなったり、無かったモノが生えてたり、男が女に、女が男に、もっと不思議なのは、麻酔で眠ったまま、二度と目覚めなかったり、人間以外の、ダルマになったり、芋虫になったり、剥製になったりする、不思議なメルモちゃんなのよ！

そういうとアリスは魔理沙の服を脱がし始めた。寝たきりの魔理沙嬢の湯浴みの支度をするかのごとくかいがいしく。

剥製にした後には、元通りの服を着せるのがアリスのこだわりである。普段着ている服を着せることこそが、素材本来の魅力を最大限に引き出す方法であり、美しいと感じた対象の最も美しい瞬間を永遠の時間の中に封じ込めることこそが、芸術家として、人形師としてのアリスに課されたミッションであるとアリスは信じているのだ。そのために、服の着付けも考えて、丁寧に服を一枚一枚、吟味するかのよう脱がして行く。まるで、オレンジやメロンの外皮をそのままに、中身だけを抉り出してジュースで粉微塵に砕き、凍らせた後、元の外皮の中にもどして作る高級シャーベットのように…（ひひひ、人間シャーベット、ひひひ）

「魔理沙、ドロワーズも脱がすわよ、いいでしょ？ 私とあなたの仲じゃない…」

するり…と綺麗にドロワーズを脱がしたかったのに、現実はどうもいくものではない、ドテツとしたマグロ状態の魔理沙の臀部と大腿部を右に左に持ち上げながら左右交互にドロワーズを摺り下げていく。

うふふ、「しゅじゅちゅ」しちゃったら、魔理沙、あなたは死んじゃうのよ。ざまあみるだ、あははははあ～。といつつも、見るとアリスの目からは涙が零れ落ちている。

「魔理沙が死んじゃう、死んでしまうなんてかわいそう…」魔理沙が死んじゃう、殺されちゃう、どうせ誰かに殺されるなら、私が殺してあげる、私に殺させてえ～」「魔理沙のおなかは私が裂きたいい～、おなかを裂くのは私の役割って決まってるんだからあ～」「魔理沙を殺していいなんて誰が言ったのよ？」「殺すんだったら首吊りよ！」「ばか！首吊りしたら綺麗な剥製になんないじゃない」「私は首吊りが好きなのに、なんでいつも私の望みだけ叶えられないの？ひどい！」「誰が魔理沙を殺すの？魔理沙

を殺すなんて許せない、そんな奴、殺してやる！」「どっちだって同じじゃないの、人間なんて、どうせほっといたってあっという間に醜く年老いて死んじゃうんだし」「アリス、あんたがココに、この秘密の地下室に魔理沙を引き摺り込んだということは、もう生かして返す気がないってコトの証拠でしょ、あの門を潜った時点で、もう魔理沙は死んでいるのよ」「もうちょっと、もうちょっと生きてる魔理沙と遊んで居たいわ」「そんな中途半端な生殺しの延命措置なんて、残酷だわ」「あら、なに云ってるの、全ての医療行為は延命行為じゃない？ 延命期間が平均余命を上回れば、根本治療と代わらないでしょ」「延命されている間、ずっと薬漬けで医療費を吸い取られ続けるのね、税金の値上げには反対する人間でも、医療費には文句を言わないから、一方で病気をバラ撒いて、もう一方で薬を売りつける... 増えすぎた人間、生きる価値のない人間を間引きして搾れる相手からはトコトン搾り取る、なんて頭のいいヤリくちなのかしら」「税金をそのまま投入すると、予算額だけで何を造ってるかパレる危険性があるから機密保持のために医療・福祉費の名目で愚民の皆さんから吸い上げたお金で、秘密裏にヤマト方式で汎用『人形』決戦兵器・グランギニョル(巨大傀儡)・ガルガンチュア壱號を建造するのよ！ ガミラスが攻めてくる可能性は低いけど、もし攻めてきたらその被害総額は予想不可能なほど甚大だから、それもまた福祉の一環だといえるわね」

... アリスの中で、上海人形、蓬莱人形、フランス人形、オランダ人形... 無数の人形たちの人格がめいめい不規則発言を... 好き勝手なことをほざいていた。なんとまあ、無責任で支離滅裂で破壊的で回復不能な状況でありましょうか...

(アリスの人格は完全に分レ... もとい、統合失調していた。「分裂」という言葉には支離滅裂で破壊的で回復不能のイメージがあり、病名に対する偏見が差別感情を促すとの理由から、「統合失調」という言い方に変えるべきだという運動があり、言葉の置き換え... いわゆる「言葉狩り」が行われたが、その結果現在では「統合失調」略して「糖質」(ゼロ、ゼロ、ゼロ、糖質ゼロの耐ハイだ~、クマソ耐ハイ)という言葉自体がある種の精神に問題を抱えた人間を揶揄する、世間公認のあからさまな隠語として定着してしまっている。差別というものは言葉の中にあるのではなく、人の心の中にあるものだから仕様が無い。え？「統合失調」と「解離性同一性障害」の区別ができていないって？ どっちだって同じジャン！ どうせどんな言い方をしたって所詮キビ は ガイなんだ い。それに精神疾患の病名なんて、占い師のご宣託みたいなもんで、あんなの科学じゃないでしょ。それが証拠に、凶悪な犯

罪が起きるたびに容疑者の精神鑑定がおこなわれるけど、そのつど精神科医の診断が割れるじゃない。本当に精神医療が科学なら、10人中9人は同じ結論を出すくらい判定基準が定量的じゃなきゃおかしいんでないかい？ え？ 違う判断をする医者は勉強不足だって？ 専門家ですら勉強不足なら一般人にわかるわけないし、勉強不足の専門家がそんなに沢山居て、そいつらが専門家でございと名乗っているんじゃない怖くて医者にも掛かれやしないじゃない... え？ 原告側の鑑定医と被告側の鑑定医で意見が割れるのは当然だって??? そんなの科学じゃないじゃない! そんなの政治学じゃない!? そんなの経済学じゃない!? つまり、医学とか政治学とか経済学ってのは科学ではない... 一種のオカルトだってコトじゃない!!! ケッ、ケッ、ケーザイのケ、夜は酒場で運動会、楽しいな・楽しいな経済にや卒論も試験も何にもナ~イ (皆で入ろう経済学部)

(筆者は仰仰と欲求不満のようである、困ったんだ)

(サーカスのライオンが猛獣遣いを噛み殺しても死刑は適用されない。(殺処分されるかもしれないが、人間として死刑にされるわけではない)それと同様に、精神異常者は人を殺しても死刑は適用されない、それは精神異常者が「人間の埒外」にあるというコトだ。「ラチガイ」と「ピチガイ」... 一字違いで... そんなに違わない!!そしてアリスはいくら外見が人間の少女そっくりであったとしても、所詮人外のモノ、魔女、仙女(仙人の女性版?)であり、「普通(?)の人間以外」であり、「人間の埒外」の存在なのだった)

やっと魔理沙を一糸纏わぬ姿にしたはずのアリスが、浮かぬ顔をして言う。

「何か違う、魔理沙の体に触れている間中感じていたこめかみがチリチリいう感じ、薄いガラス越しに触れ合ってる感じ、体の表面にうっすら目に見えない膜のようなものが張られている、これは... 結界ね、魔力の種類からして、弱い防御力もあるようだけれど、むしろ目くらましの効果を狙ったものね」

アリスは精神を集中させると、結界破壊の法を切る

「世の理を歪め、偽りの姿に身を包む者よ、呪われよ!我が声が聞こえし天使よ、速やかに来たりて主が人の祖に教え、人の祖が汝らに教えし真の名によって示される

この者の本質を我に示せ。ア・ナ・ヤ・ワ・ア・ホ・ギンガ・ワ」

呪効の発動に伴い周囲の空気が帯電してオゾン臭が漂い、室温が一気に2～3 下がる... 魔理沙の体表を覆っていた結界がメッキが剥げるようにパリパリとほどけ、剥げた結界がドライアイスの小片のように空中に蒸散していく。そして魔理沙の真の姿が露わになる...

(アリスは地味だが実効性の高い魔術もこなせる、本格派の魔術師なのだ)

目くらましの結界が解けた魔理沙について、最初にアリスの目に留まったのは、黒く真っ直ぐな髪だった。東洋的なふっくらした顔をして、まるで、市松人形のような魔理沙。

魔法の解けた魔理沙の顔つきは、紅魔館の中華な門番... 紅美鈴の顔つきにも似ているとはいえ、すらりとした長身で出るところは出たメリハリのあるボディラインを持ち、光の当たり方によっては緑にも見える虹彩と鮮やかな赤毛、鼻筋が通って彫りの深い顔立ちをした紅美鈴は同じ東洋人ではあっても、中東に近い、西域の遊牧民の血が濃く出ているようである。それに比べれば小さい体でどちらかといえぱずんぐりむっくりの上になずん胴な魔理沙は典型的で伝統的な農耕民族としての日本人の顔つき、体つきをしているといえた。

【宣伝】



紅美鈴 Tシャツ「巫女捕まえて E キモ T」 ... お譲りします、貴方に。

極東神殿騎士団 <http://luminel.pro.tok2.com/>

目くらましの魔法が解けた魔理沙は、鼻の穴が正面から見える獅子鼻の上に団子鼻。彫りの浅い、のっぺりとした典型的な極東アジアのモンゴロイドの顔つきをし、まぶたもふっくらとして、見ようによっては腫れぼったく見える。

意識を失っているにもかかわらず、丸顔でありながらも強い意志を感じさせる顔だ。その容貌は、朝鮮系の渡来人 將軍万福の作と伝えられる興福寺の阿修羅像。今まさに帝釈天との決戦に挑む、どこか憂いを帯びた阿修羅を髣髴とさせる貌であった。

アリスは思った。今の魔理沙は、博麗神社の巫女、博麗霊夢によく似ている。二人の間柄を知らない者が、魔法の解けた魔理沙と霊夢を見比べ、体の小さな魔理沙が霊夢の妹だと告げられたら信じてしまうだろう。確かに、才能はあるがどこかのんきに見える長女の霊夢に対し、魔理沙は生まれたときからライバルとしての姉が居るために、抜け目のない立ち回りをするのを余儀なくされた次女のように見えるのも仕方のないことかもしれない。

魔理沙が魔法で髪を茶髪に染め、ゆるくウェーブをかけているのは、霊夢との違いを際立たせ、霊夢と自分を同列のものとして比較させないために、イメージ造りとしてやっていることではないかとアリスは推測した。

【宣伝】



腋巫女Tシャツ ... お譲りします、貴方に。

極東神殿騎士団 <http://luminel.pro.tok2.com/>

次にアリスが気づいたのは、魔理沙の体中の傷痕だった。ごく最近の傷は、肌に近い色の布の裏側に粘り気のある膏薬を塗って貼り付けて治療中のようだ。次に新しい

傷は、黒褐色のかさぶたに覆われている。かさぶたがなくなった傷は赤く膨れた、いわゆるミミズ腫れの状態になっている。ミミズ腫れも引いた古い傷は、色素をもつ表皮が失われ、毛穴もなくなり白っぽく窪んで見えた。

そんな傷あとが、全身に、所かまわず、びっしり無数にあるのである。

特に、右肩・左わき腹そして右太ももの古傷は、肉が大きく抉れたらしく、白っぽいケロイド状に凹んでいた。

「これが、魔理沙の本当の姿... 確かに、こうでなければおかしいわ、こうでなければ説明がつかないわ...」(こんなの、魔理沙じゃねえ~! ? / 腸魔理沙)

そういつつ、アリスは半ば無意識に魔理沙の傷痕を指先で一つ一つなぞっていた。

... 全身の、ありとあらゆる場所の傷痕、いまだに乾ききっておらず、体液が滲み出してくる傷痕も含め、全ての傷痕を、いとおしそうに、慈しむように... (魔理沙、貴女がどんな姿をしていても、私は貴女が大好きよ)

魔理沙は、満身創痍といってもいい痛む体に鞭打って、そのことをおくびにも出さず、笑顔でアリスに会いに来たのだ。ただ単に物に釣られてアリスの家まで来たわけではなかったのだが、残念ながら今のアリスにはそこまで考えが及ばなかった。

魔理沙は、いわゆる貧乳で、見ようによっては少年のような体つきをしていた。丸顔なのは、太っているからではなく、骨格がそうなのだろう。うっすらと、発育途上の少女らしく、浅い角度の円錐状に、いいわけ程度に盛り上がった胸。一本一本数えられる肋骨とその谷間。痩せて、脂肪分のほとんどない薄い皮膚の下には、太くは見えないが強靱なワイヤーのような筋肉が一部の隙もなく精密機械のようにコンパクトに押し込められている。その姿はまるで生きた凶器。防御を無視し、素早い立ち回りによる回避と一点集中型の攻撃力の増強にのみ能力値の全てを割り振り、手刀で敵の延髄をへし折り、あるいは隙を衝いて敵の眼窩に指を突っ込み眼底を突き破って脳に達した指をぐりぐりと回転させ相手を悶死させる人間離れした体術と、魔術の一種といってもいい忍術を駆使し五芒星形の八方手裏剣(不確定名: Stars)を得意とする霧雨魔理沙は「霧雨流忍法」の使い手の女忍者、いわゆる「くノ一」だったのだ。

人知れず努力家の魔理沙は、夜な夜な「蛤弁天」や「紅蓮菩薩」のような、自らの死を以て相手を滅殺する壮絶なエログロナンセンス忍法の特訓に血道を挙げ続けてきたのかもしれない。

第五章 『魔法少女の謝肉祭』

アリスは眠り続ける魔理沙の頭に手を伸ばして抱え込み、顔を近づけた。日向臭い乾いた汗の匂いのする魔理沙の頭をククンと犬のように嗅いで言った。

「ああ魔理沙、貴女の頭からはチキソラーメソの匂いがする」

(登録商標を出すのはマズいと思うのですが、単に「中華スープ」だとか「チキンスープ」だとかの記述だと、『チキソラーメソ』ほどのインパクトが出せません…)

チキソラーメソ発売開始50執念祈念!!五獣の執念じゃからのう…)

「ああ魔理沙、貴女の耳からはじゃがバターの匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の鼻からは酢昆布の匂いがする、梅こぶ茶の匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女のほっぺたからは塩鮭の匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の口からは今朝喰べた沢庵の匂いがする、今朝飲んだ味噌汁の匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の首からはアジヒラキの匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の腋の下からは酢飯の匂いがする、しめさばの匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の二の腕からは縁日の屋台で売っているマヨネーズのたっぷりかったソース焼きそばの、たこ焼きの、広島風お好み焼きの匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の日に焼けた腕からはこんがり焼きあがった鶏の照り焼きの匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の手の手ひらからは海苔巻きおにぎりの匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の指先からは枝豆の匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の胸からはブルガリアヨーグルトの匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の乳首からはビ°スコの匂いがする」(商品名はヤバイよな?)

そういいながら、アリスは魔理沙の乳輪を、旧式の電話機のダイヤルを回すように、乳頭をわざとさけてクルクルと指でなぞった。

すると、魔理沙の乳輪の血行が良くなり、乳輪がぷっくりと膨れ、相対的に乳頭が乳輪の中に埋もれていく。うふふふふ。

乳輪がこれ以上膨れなくなったことに気づいたアリスは、今度は乳輪に埋もれた乳頭を指でつまみ出し、ぷにぷにと摘んだり緩めたりを繰り返す。

すると、今度は魔理沙の乳頭の血行がよくなり、乳頭がぼってりと膨れて乳輪の真

ん中からコンニチワと顔を出す。

乳頭の膨張が限界に達すると今度はまた乳輪を回し始める。



(これは薬缶です。薬缶の蓋ですが、なにか?)

「うふふ、魔理沙のカラダ、ぶにぶにして、おもしろーい!!!」

アリスはしばらくその遊びに興じた。ずっとこうしていたい、こうしてもいられない。名残惜しそうに乳頭と乳輪を後にしてアリスの指先は女体巡り・魔理沙のカラダ巡りの旅を再開する。(バイバイ魔理沙、バイバイ魔理沙の乳首...)

「ああ魔理沙、貴女の洗濯板みたいな肋骨からはスペアリブの匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女のみぞおちからは少し古くなったキムチの匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女のおなかからは子豚の丸焼きの匂いがする、豚骨スープの匂いがする」

(魔理沙の腹部には、ドロワーズの紐で圧迫されてできた赤い筋状の跡が残っていた)

「ああ魔理沙、貴女のお臍からは胡麻団子の匂いがする、胡麻ラー油の匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の一番可愛いところ、貴女の一番感じやすいところからは、ドリアンの、ブルーチーズの、魚醤の、ホヤの、カラスミの、烏賊の塩辛の、ワカメの、サザエの、牡蠣雑炊の、鮑の、蛤の、赤貝の、ほっき貝の、アコヤ貝の...あらゆる貝類の、潮くさい匂いがするう」(うふふのふ)



猥褻画像、牡蠣雑炊。成人指定。

「ああ魔理沙、卵黄の栄養たっぷりの黄色い・黄金色のカラダに、褐色のカaramelソースをトッピングした貴女は、甘い、甘ぁ～いカスタードプリン、プリンアラモードだったのね」

「ああ魔理沙、貴女のお尻からはピーナツバター、奈良漬、くさやの干物の、バレンタインデーに焦がしてしまった苦い思い出のチョコレートの匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の太腿からは煮汁のたっぷりとおでんの大根の匂いがする、太く遅しいボンレスハムの匂いがする」(登録商標じゃないよね?)

「ああ魔理沙、貴女のふくらはぎからは焼きとうもろこしの匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女のかかとからは豚足の匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の足の裏からは茹でたそら豆の匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女の足の指の間からは水戸納豆の匂いがする」

「ああ魔理沙、貴女のつま先からは餃子の匂いがする」

「あああ、可愛い魔理沙、食べちゃいたい魔理沙」

「あああ、こうやって、いつまでも魔理沙の体を撫でさすってほしい、魔理沙の匂いを嗅いでほしい、魔理沙の体を愛でてほしい…」

アリスはジュルジュルと涎をすすった。

「若い女の子、今を生きている女の子、生の女の子は本当に強くてイイ香りがするわねえ。自分の時を半分止めてしまった私とは…半分干からびてしまった体をエー

テル体で水増ししている私とは大違いだわ」(そう、専門ではないものの実はアリスにもある程度は時間を止める(夜を止め、少女少女の刻を止める)程度の魔法を使う能力はあるのだ)

「昔の私は自分の体の女の匂いを疎ましく思っていたけれど、失ってしまうと懐かしくうらやましく感じるものね。女でいることは、臭くて・重くて・みっともないことだけど、大切なものは失ってはじめてわかるものだわ。私は、生きてる魔理沙の本当の大切さに気付きたい。気付いてみたい。だからこそ、生きてる魔理沙を壊してみたい。取り返しのつかないコトをしてみたい。取り返しのつかないコトをしてしまって、生きてる魔理沙を失って、悲しくって、泣き暮らして、後悔して、本当の魔理沙の大切さを思い知りたいたい！！」

雲の上に天国なんてない、ただ空があるだけ... 愛なんて存在しない！愛なんて見ることとも触ることもできやしない。(あなたはそんなオカルティックなモノの存在をまだ信じてたんですか?)

でも、そんな愛の存在を確認できる方法が、たった一つだけある。壊してみればいい！ **後悔は素敵！！**

(ゆがんでるなあ、ゆがみきってるなあ。ああ、いびつ過ぎる愛のカタチだなあ)

「でも、怖い。もし魔理沙が死んでも、私の心に何のさざ波も立たなかったら... 他の、どこにでも居る普通の少女少女を剥製にした時と同じくらいにしか良心が痛まなかったら、私の心は死んでしまっている。私はもう死んでるのと変わらない... それに気づくのが怖い怖い怖い！！お願い！魔理沙！！私を罰して！私に罪悪感を感じさせてえ~！！！！」

「罪には蜜を、罰には唾を！」

(余談だが(余談ばかりだけど)罪悪感を抱いている人間は操りやすい。だから有史以来政治家や宗教家は被支配民に罪悪感を植え付けようと躍起になってきた、性欲や金銭欲のような、必要不可欠な『欲』を罪と感ずるように仕向けてきた... 騙されてはいけない、目を啓け！奴らの金庫にこそ罪業の源のはずの金が隠され蓄えられているのだゾ！！)

本当に美しい物語は、失われるから美しい。二度と戻らないから美しい、ゲームと違って、コンティニューなんかできやしないから・やり直しがきかないから・ロスト

されるからこそ美しい(*おおっと*)。今こそ示される、魔理沙の命の儂さ、美しさ、かけがえの無さ！何度でも生き返るから、ゲームは子供に命の尊さを見失わせると訴える者共よ、恥を知れ！勇者魔理沙よ、なぜにもがき生きるのか、滅びこそ我が喜び、死に往く者こそ美しい。コントラ・デクストラ・アベニュー。

「ああ、早く食べたいけど、食べちゃダメ！」

「ああ、早く殺したいけど、殺しちゃダメ！」

「落ち着いて、落ち着くのよアリス！ 先ずは浣腸しましょうね」

アリスがなにやらリモコン装置のようなものを操作すると、手術台が子供向けロボットアニメみたいな機械音を発してトランスフォームした(敵に渡すな大事なりモコン、悪も正義もりモコン次第)。この手術台はさまざまな術式に対応した高機能の複合機であり、分娩台にも変形する優れモノなのだった。(でもコピーや FAX やプリンターやスキャナーにはなりません)

(かつて、「小説」が最先端をいくトンがったバーチャルなメディアだった時代があった。小説や文学に現を抜かす者に対して、モノのわかった連中は「いくら本など読んでも、実体験の伴わない、バーチャルな知識を頭の中に詰め込むだけであり、百万行の文章よりも一回のピンタが、一回のキスのほうがずっと重い意味を持つものだ」と言い放ち、厭世的で退廃的な作風の小説家が自殺した際、マネをして死ぬ若者が出るに及んで、それみたことか！とその当時の最先端のバーチャルメディアであった小説を槍玉に挙げたのだった。しかし、現在(21世紀初頭)では、小説を読んでも、誰もそれを非難しない！むしろ、テレビの深夜バカ番組を見たり、漫画を読んだり、ビデオ・ゲームで遊んだりするよりはマシだと思われる。親の中には、「低俗でもエログロでもいいから活字を読んでくれ」と思っている者すらいる体たらくである。文学は死んだ！今はかろうじてビデオ・ゲームとインターネットが、親たちが槍玉に挙げるトンがったバーチャルなメディアであるが、いづれもっとトンがった、よりバーチャルなメディアが出来れば、親たちが槍玉に挙げる対象も移り変わっていくだろう... 芥川龍之介は「河童」もいいけど「桃太郎」だろッ！えッ！？)

第五章 『分娩台』あるいは『幼児性欲の肛門期娘』

大腿部固定具に、下腿部固定具、さらには菊座固定具...

アリスはそれぞれの固定具に、魔理沙のカラダのそれぞれの部位をあてがい、ナイロン繊維でできた大面積のマジックテープで固定していく。どんなに力の強い者でも、これを引き剥がすのは無理だろう。当然ながら、分娩台に固定された魔理沙は、分娩の際に妊婦がとるであろうポーズをとらされるはめになる。

「まあ、魔理沙ったら、局部をおっぴろげて、いい格好だわ！！」(御開帳～！！)

「貴女は鶏よ、チキンよ、私に食べられるために、ただそれだけのために今まで生かされて、ぶくぶく育ってきた、貴女はプロイラー娘なのよ」



成人指定、猥褻画像！？ わはははは～！！(こんなばっかしや)

「神は霧雨魔理沙を私に手渡してくれた」

「それは蜜と乳が流れる約束の地、肥沃な大地と従順で支配しやすい民が棲む地、そこに棲む民は武装もしておらず、他国とも同盟を結んで居ない、蹂躪しやすい民」

(武装を拒否した人間を蹂躪して何が悪い！植民地支配なんて、どの国でもやってるコトじゃ～ん！！... 選良思想は危険思想？)

「神は全能であり、短期的に見ればどんなに理不尽で残酷に見える仕打ちも、大いなる神の計画の一部であり、全ては神の意思であり、正義なのよ。ただ、ちっぽけな人間や妖怪には、神の真意を理解する力がないだけなのだわ」

「私がどんなに卑怯・卑劣で残酷な行いをしたとしても、それもまた神の意思なんだわはははは」

(「悪魔」とは、異教の「神」である！「悪魔」たちの中で、一番狡猾で、一番強かったモノが「神」となった！！「神」とは、一番強かった「鬼」「悪魔」「悪霊」の成れの果てなのだ！！！)

「神は、自分の似姿として人間を造った。人間の中に憎しみ、残酷、卑怯、裏切りがあるとすれば、それは神の中に憎しみ、残酷、卑怯、裏切りがあるからよ」

「神が万能なのに、世界にはこんなにも憎しみが溢れている、だとしたら神は憎しみあう人間を見るのが好きなのかわ、死ぬほど好きなのかわ、好きで好きで死なないのかわ。でなければ、神は万能ではないということだけれど、そもそも一神教では万能の存在を神と呼ぶのだから言葉の定義上それはありえないわ」

「神の全能を疑う人間、神のお創りになられた世界に不平・不満を云う人間は、それ自体、神を信じない不信心者であり、悪魔の徒なのよ！」(どっちが悪魔だか・・・ひでえ)

(かつて、アインシュタインは「神はサイコロを振り給わず」と言ったが、現在では「神は朝食のメニューを選ぶのにすらサイコロをふるギャンブル中毒」であることが量子力学で証明されている。神はギャンブラーであり、ゲーマアであり自己中心派なのだ！神のゲームの勝利条件が、敵の種族を殲滅することなのか地球が滅ぶ前に人類を宇宙に脱出させることなのかは神の身ならぬ私にはうかがい知ること出来ないが、一つだけ言えるのは、神にとって大切なのはゲームに勝利することであって、その目的のためなら手駒の千人や万人、100億人が死のうが生きようが、そんな些細なコトなどどうでもイイコトなのだ！！あるいは、世界は神にとって、眺めて楽しむ環境ソフトなのかもしれない。人類の演じる愛憎劇を、くだらぬメロドラマを高めから見下ろして、楽しんでいるのかもしれない。神が退屈して世界を終わらせてしまわないように、人類は道化を演じ、絶えず血生臭く、愚かで滑稽な弾幕ごっこを繰り返さないと、世界は飽きられ放り出されてしまうゾ！！そおれ、それッ！！！！)

(神を信じる人間なんか、早く氏ねばいい。天国の門は彼らの前に広く開け放たれているであろう！！無理に「狭き門」に突入しようとする(ｷﾀｲｲかもしれない外)

仰仰と病気になっちゃうがしれんので、無理はやめようネ、比比)

魔理沙は羽根をむしられた鶏のように、あるいは、展翅台に虫ピンで磔にされた美しい黒アゲハのように分娩台に固定されている。

その姿は、美しくも、醜くも、情けなくも、儂げにも、遅しくも、猥褻にも、可憐にも、愚劣にも、神聖にも、下品にも見えた。

綺麗は汚い、汚いは綺麗。これから始まるのは魔女の謝肉祭。魔法少女の謝肉祭。「人生の勝利者と負け犬の狂宴」「生き残った奴の勝ちだ」「残虐行為手当」「パワードラッグを探せ」「つわものたち」

よく見ると、魔理沙の肌には、ぷちぷちと鳥肌が立っている。玄室に飾られた人間剥製を劣化させないために、低めに設定され、ひんやり、寒々とした玄室の室温のせいだろう。それを見たアリスは云う。

「寒い？魔理沙？もう少しのガマンよ。もうすぐお彼岸よ。『暑さ寒さも彼岸まで』って云うでしょ、もうすぐよ、もうすぐ向こう岸にお花畑が見えてくるわよ(きよにうの渡し守と浮気しないでね)、暑くも寒くもない幸せの世界が待っているのよ。ご冥福・ご冥福・うふふふふ」「みんな天国、しあわせ・しあわせ！」
「もうすぐ死んじゃう魔理沙さん、殺されるとは閻魔様でも知らぬ仏の映姫さん」

アリスは3リットルは入りそうな大きなビーカーにグリセリンを1リットル、蒸留水を1リットル入れてかき混ぜた。

「うふふ、魔理沙、今からあなたにタプーリの浣腸液をご馳走してあげるわ、死刑前夜の豪華な食事よ、最後の晚餐よ、残さず飲むのよお、ひひひ」

「こうして見ると、貴女のお尻って安産形ね。玉のように可愛らしいうんこを分娩・出産してね！」

アリスは本当に楽しそうだ。



セクシーなラマのお尻。

グリセリンと水が十分に交じり合ったのを見届けたアリスは、巨大な注射器のようなガラス製のシリンダー状の浣腸器の注入口をグリセリン浣腸液に浸すと、ピストンを引っ張って、バキュームカーが旧式の汲取式便所のし尿を吸い上げるかの如く、真空力によって浣腸液を吸い上げた。粘液質のいやらしい水音、納豆・とろろ・めかぶそばをすすするような快音が玄室中に響き渡る。

「うふふ、魔理沙、貴女の菊門、カワイイ」

「まるで、エスプレッソコーヒーの淡い褐色の泡の渦の中心にできたうっすらコーヒー色の窪みみたい」

「あるいは、バニラアイスとチョコレートアイスが渦を巻いて交じり合ったマーブルアイスみたい、うふふ」



バニラとチョコレートの交じり合った、マーブルアイス。

(アリスは「幼児性欲の肛門期野郎... もとい肛門期娘」「乳児性欲の口唇期娘」「胎児性欲の羊水期娘」に違いない「羊水は、タイマをまいた、ハイ吸うよ」回文21面相)

「舐め舐めしちゃおうかしら、うふふ」

そう云いつつも、アリスは巨大な浣腸器を魔理沙の菊門に押し当てる。

魔理沙の菊門は乾いているせいか、最初は浣腸器の射出口の侵入を拒んでいたが、アリスは手馴れたもので、浣腸器の先端... 射出口から少しづつトロトロの浣腸液を垂らしつつ、魔理沙の菊門の外側から内側に向かって、浣腸液でぐるぐると螺旋を描いていく。

周辺に茶褐色のかわいらしいちぢれ毛がポショポショとまばらに生え、中心に向かって皺が放射線状に収束していく、まるでゴム風船の縛り口を風船の内側から眺めているような魔理沙の赤褐色の菊門の中心に浣腸器の先端が達した瞬間、魔理沙のカラダは危機的状況を察知したのか、太腿を閉じようとし、括約筋を思い切り緊張させ、浣腸器の先端の進入を拒もうとした。しかし、その抵抗も虚しく、浣腸器の先端... 射出口は魔理沙の菊門にすんなりと、最初からそうなることが定められていたかの如くあっさりと、奥深く挿入されてしまったッ。(魔理沙は逃げようとした... しかし、回り込まれてしまったッ!!)

ゆっくり、ゆっくりとアリスは浣腸器のピストンを押し込み、ひんやりとしたグリ

セリンの水溶液を魔理沙の内部（なか）に射出していく。（じゅじゅじゅじゅじゅ～）

無理に急いで拒絶されないように、じっくりと時間をかけて、じらすかの如く魔理沙の腸内に浣腸液を注入していく。100cc、200cc…500cc、1000cc…ちょっと休んで、1500cc、そして、とうとう2000ccを魔理沙のカラダは飲み込んでしまった。すばらしい！！

先程まで、大きないびきをかいていた魔理沙嬢も、自分の体に異変が・危機的状況が生じているのを察したのか、いびきをやめ、「あうっあうっ」というような、アシカがオットセイの鳴き声のような変な声を発している。

アリスが空っぽになった浣腸器を魔理沙の菊門から引き抜くと、たらりと1滴の浣腸液が魔理沙の菊門から零れ落ちた。

魔理沙は2000ccもの浣腸液を飲み込んだ挙句、下腹ぷっくりちゃんになってしまいました。

人間は、睡眠中は自律神経の働きで排便が抑制されている。そうでなければ睡眠中に垂れ流しになってしまうだろう。魔理沙も、眠りながらも、便失禁をしまいと…注入された浣腸液を漏らすまいと、がんばって我慢している…（努力の『努』の字はどう書くのッ!?…ルッ、『女』の『又』に『力』ありッ、ハイッ）

アリスは、コントで天井から落ちてくるような特大の真鍮製の金ダライを魔理沙の股間の真下に挿入し、まるで、これからもらえるプレゼントを心待ちにする夢見る少女のようなうっとりした眼差しで魔理沙の局部を注視する。（いわゆる「かぶりつき」である。踊り子さんには手を触れないでください）

待つこと3分、じっと我慢の子であった。魔理沙の腹からは、喉を撫でられた猫が発するようなゴロゴロという音が聞こえている。そろそろ限界が近づいて、眠れる森の魔理沙嬢は菊門をヒクヒクと痙攣させ始めた。トイレをガマンしている夢でも見ているのだろうか？息が苦しげになり、顔から脂汗を流し、歯を食いしばって耐えている。

それでも猛烈な便意を我慢しきれなくなり、限界が近づいているのか、とうとう首を、イヤイヤをするかのように左右に振り出した。さらには、腰を前後にバタンバタンと激しくゆすり始めた。

もう、我慢できなくなっているらしく、魔理沙は眠りながらも口をぱくぱく開いた

り閉じたりしてあえぎ声を漏らし始めている。

「ひいー、ひいー、ふうー…」(ラマーズ法かよ)

そして今度は腰を左右によじり始めた。見ようによっては発情したメスがオスを誘惑しているような、エロティックな所作に見えなくも無い。

その様子を嬉しげに、生温かく見守るアリス。なぜか、アリスの手には、この玄室兼手術室には不似合いな一本の棒切れ…木の枝が握られていた。長さは20cm程度、太さは8mm程度だろうか、一本のまっすぐな枝分かれしていない、樹皮も剥かれていない、どこにでもあるような、そこらの森で拾ってきたような木の枝である。鉛筆や割り箸程度の太さと長さだと思ってもらえればいい。



どこにでもありそうな小枝

そして、アリスは眠り続ける魔理沙に暗示をかける。

「魔理沙、ここは天下の往来よ、みんな見てるわよ。ここでウンコを漏らしたら、みっともないわよ、あら、沿道の家を借りて貰うつもりかしら？ ざあ～んねん、拒否されましたぁ～！！ 貴女、いつも泥棒したり、悪さばかりしてるから、こんなときに見捨てられるのよ。ざまぁないわね」

「魔理沙、うんこが出たいの？ うんこが出たがってるの??」

「貴女がココでうんこを漏らしたら、一生言われ続けるわよ『あれは黒服の魔法使いが街中でうんこを漏らした翌年の出来事だったな』なんて、時代の指標に使われるようになるわよ、うふふ」

アリスの言葉が、魔理沙の夢に干渉しているのであろうか、魔理沙の表情が羞恥心に歪む。それにしても、アリスはなんという残酷な刑罰を思いついたのであろうか。アリスは上機嫌で、拳句の果てに歌まで歌いだす。

「マリちゃん道タンコ垂れて、紙が無いから手で拭いて、もったいないから舐めちゃった」

「一瘤駱駝は一瘤うんこ、二瘤駱駝は二瘤うんこ、霧雨魔理沙はもりもりうんこ」

「うんこ、うんこ、魔理沙のうんこ、魔理沙の弁当、うんこがおかず」

「魔理沙憎けりゃ糞まで憎い 憎さ余って可愛さ無限 可愛い魔理沙には糞をさせる
魔理沙のうんこは可愛いうんこ 可愛い魔理沙の可愛いうんこ ...」



二瘤駱駝は二瘤うんこ？

「ぶしゅぶしゅ」と音がして、排便の直前の、先走りのガスが漏れ始めた。
ダイエットをしている若い女性にはありがちなことだが、魔理沙もやや便秘気味らしく、腸カタル気味の、焦げ飯に似た匂いが周囲に漂い始める。

魔理沙は、夢の中でも便失禁しかけているらしく、普段の猛々しくふてぶてしく、飽くまで強気な態度からは想像もつかないような、恥辱にまみれ、言い訳みだ、哀れと許しを請うような表情をしている。よく見ると、うっすらと眼に涙さえ浮かべて。
(これよ！この表情が見たかったのよ！！) アリスは狂喜したが、しかし、この程度ではアリスの、魔理沙に対する狼藉は納まらない。(復讐するは、アリスにありんす)

そうこうしているうちにも、魔理沙の便意のボルテージが上昇し、最初は「とまどい、否定」をしていた魔理沙が、「混乱、怒り、拒絶」の段階を越え、「割り切り、あきらめ」を通過点として、「受容」の段階に達し、いまだに羞恥心は残るものの、自分の運命を悟り、ふっと「いい顔」になって排便行為にいそしむ準備ができたようである。

(脱糞は解脱に似ている！ 肉体が、かつて自らの一部だったものを大便という名の異物として体外に排泄して身軽になり清しい気分になるとき、人はそれを脱糞と呼び、魂がかつて自らの一部だった肉体を捨てて自由になるとき、人はそれを解脱という... 肉体にとって魂はうんこみたいなものなのか？ 魂にとって肉体はうんこみたいなものなのか？ どっちなんでしょうねえ？)

そして、とうとう、魔理沙の菊門を押し広げるようにして、黄金の聖母像が、観世音菩薩様が、今こそ釈迦滅後五十六億七千万年後のそのときとばかりに衆生救済に地に降り立った神々しい弥勒菩薩様が、その頭部を菊門の奥から覗かせたのである。（おお、大日如来様の光臨じゃ、御来迎じゃあ～、あなめでたや、ありがたやあ～！！）

そのとき、なんとということか、アリスは手に持った木の枝で黄金の聖母像の、観世音菩薩様の頭を突っつけたのである。（つんつくつん、つんつくつん）

神仏をも恐れぬ悪魔の所業、悪逆非道とは将にこのこと！！（まさに外道！！）

すると、なんとしたことか、先程まで顔を出しかけていた黄金の聖母像が、観世音菩薩様が、まるでビデオを逆回しにするかの如く、魔理沙のカラダの中に引き返してしまわれたではないか。（おお、天照大御神様が、天岩戸にお隠れになってしまわれたあ～！！ このままでは、世界は闇に閉ざされてしまうう～）

「天岩戸を開くには、アメノウズメが踊らないといけないわね」

そう言うが速いか、アリスは突如服を脱ぎだし、全裸になってひらりひらりと可憐に優雅に舞い踊り始めた。

その舞は、性的なニュアンスを多分に含むものであり、すさまじくイヤラシイにもかかわらず、どこか切なく、生命の儚さ、命の移ろい易さを思い起こさせるものであった。

魔理沙が排便をし尽くしてしまえば、それだけ魔理沙の最期の刻が近づくからかもしれない、あまりにも完璧なプロポーションのアリスがさらに完璧に舞い踊る様子が、真夜中に蒼い月明りを浴びて踊るセルロイドの人形か、アンドロイドか、ボーカロイドか、マーガトロイドのような冷血で人工的で人間モドキにしか見えない姿が不気味だからかもしれない、なにか古代の絶対的な権力者、太陽神の化身としての王がお隠れになったときだけに舞われる死者復活の儀式、多くの生贄を伴う血生臭い葬送の儀式に供される、黄泉の世界に旅立つ王のお供、冥く冷たい旅路の途中で王のカラダが冷え切ってしまうように繰り返し暖めて差し上げる役目を帯びた若々しく美しい殉死者としての巫女の「必死」の舞を髣髴とさせるものだからかもしれない。

アリスの可憐で華麗な舞を、部屋の周囲をぐるりと取り囲む『人間剥製』たちの、ガラス製の義眼がじっと見つめていた。

第六章 『排便拷問』

一度はお隠れになられた天照大御神様でしたが、アリスの華麗な舞いにさそわれたのか、またそろりそろりと天岩戸から外の様子を伺いだしたのです。するとまた、アリスは恐れ多くも不敬極まることに、魔理沙の菊門から頭を覗かせ始めた黄金の聖母像の、観世音菩薩様の、弥勒菩薩様の、大日如来様の、天照大御神様の頭を木の棒で「つつくつつ」とつつきなさいましたのでございます。

それ自体が意思をもった一つの生き物のような黄金の聖母像は、恐れをなして暖かく懐かしく、安全な魔理沙嬢のカラダの中に、その洞窟の奥に逃げ帰って、ヒコッてしまわれたのでございます。

魔理沙が弛めりゃ、アリスが突つつく、魔理沙が弛めりゃ、アリスが突つつく、魔理沙が弛めりゃ、アリスが突つつく... 同じことが何度も繰り返されたのですが、次第にその時間間隔が短くなり、テンポが速くなっていったのでございます。

もう、我慢の限界に達しているはずの魔理沙のカラダは、一度開放されかけた内圧が、行き場を失い、再三再四再五再六... 内圧が高まったのに我慢しきれず、丸一日散歩に連れて行ってもらえず、排便の機会を奪われた飼い犬のように、切なげに啼き喚いたのでした。(ヒーンヒーン)

そしてまた、アリスはお隠れになった天照大御神様を天岩戸から誘い出す舞を踊り、天岩戸が開きかけると棒でつつくするという、矛盾に満ち満ちた楽しい遊びを続けなされたのでございます。(隠れんぼにしろ、鬼ごっこにしろ、弾幕ごっこにしろ、ありとあらゆる遊びというものは矛盾を楽しむ行為であるといえましょう。そもそも、「隠れ鬼」という遊びそのものが、お隠れになった王、鬼籍に入られた王の魂を探し出し、再び命を与え、この世に連れ戻す死者復活・王位継承の儀式が遊戯化されたものともいえましょう)

とうとう、魔理沙嬢は夢の中の自分の心とカラダの食い違った命令に引き裂かれてパニックに陥り、口からぶくぶくと蟹のように泡を吹き出したのでございます。

(なんとまあ、すごい拷問があったものでございます。理性から切り離された魔理沙の魂は、夢の世界で地獄の責め苦しみを味わわされているに違いありません... それにしても、魔理沙は便意をガマンするのに必死で、息を荒げ、体中に汗をかき、時折苦悶の声をあげ、腰を・体全体をくねらせて... まるで愛し合っている真っ最

中のようにすら見える…)

もう、何度目かはわかりませんが、天照大御神様が天岩戸からご尊顔をお出しになられ、アリスが棒でつんつくなさったのですが、もうそのときには遅かったのでございます。まるで、場末の温泉街のストリップ劇場の人気の出し物…女優がバナナを括約筋の働きによって輪切りにしてみせるが如く(括約筋の大活躍う～!!)天照大御神様の頭が天岩戸に挟まれ、切り落とされてしまったのでございます。あな恐ろしや。(括約筋は女の命よ!締まるよ・締まるよ!カカなんかにじゃいられない!!)

「こっ、これはなんということでしょうか!?天照大御神様の頭が、頭が落ちてしまいました!!向う正面の鶯谷親方、これはどうしたことですか!!?」

「これはいけませんね!怨霊退散儀式は失敗です、そもそも祭りというのは神を呼び出し、願いをかなえてもらおうとする行為な訳ですが、神の世界、異界の秩序はこちらの世界の秩序とは異なります、人間にとって都合のいい和御霊・幸御霊のような神には来て欲しいが、怒れる神・荒ぶる神には来て欲しくないなどというのは人間の側の一方的な都合です、どうやら我々は『荒破吐』を呼び出してしまったようです!『荒破吐』とは東洋最大、いや世界最大の電気街の地下に封じられている雷電の神であり、その名が電気街の町名のアナグラムともなっている破壊の神です。あるいは、異世界からやってくるモノはたった一つの存在に過ぎないのに、人間が勝手に、自分の益に適った場合を「神」と呼び、自分に害をなした場合を「悪鬼・悪霊・悪魔」と呼んでいるだけともいえるかもしれません!神聖な電気街が「萌え」という名の悪霊に席卷され尽くした現在、『荒破吐』が怒り狂うのもむべなるかなです。なにせせよ、我々もここに居ては危険です、早く逃げなければ!!」(スクワッのお逃げブタ)

そして、魔理沙の便失禁が、脱糞が、排便行為が、大便の分娩・出産行為がとうとう始まってしまった。(待ってました!!)

最初は黒っぽく、硬い、エボナイトの棒のような一本グソが排泄された。

落下する固形物が安っぽく薄っぺらい^{こがね}黄金色した^{しんちゅう}真鍮の^{かなだら}金盤にぶつかる音が大き

さに響き渡る。(べこん、べとん...)

それと同時に、ちよろちよろ流れる御茶ノ水が最初白糸の滝のように「しょばしょばしょばッ」という快音を響かせ、続いてパイタリティがナイアガラの滝のようにあふれ出るが如く、轟々とあふれ流れ落ちた。

液体が...連続した滴が金盥に当たる音が「タラ タラ タラ タラ タラ タラ」と大げさに響き渡った。

それを見たアリスが歌いだす「しっこしっこしゅーびゅー、しっこしっこしゅーしょー、しっこしっこびゅーしゅー、しっこしっこびゅーびゅー...」
(うんこと同時に、おしっこを出しちゃうなんて、おかげで尿道カテーテルを挿入する必要がなくなっちゃったわ。残念ね)

そうしている間にも、魔理沙の菊門からは黄金が続々と、とめどなくあふれ出していく。西部開拓時代である、ゴールドラッシュである。

緑なす魔理沙のデルタ地帯、肥沃なる三角州と王家の谷から次々とこぼれ出る黄金。エジプトはナイルの旗本...これ、越後屋、これは何じゃ?へっへっへ、お代官様も人が悪い、見ての通りの山吹色のお菓子でございます。

最初に、石焼き芋程度の硬さのものが出て、次にバナナの果肉程度の硬さとなり、次第にあんこ程度の軟らかさのものが続き、トマトピューレ程度になり、生クリームを經由して、最後はオレンジジュースのようにサラサラな液体が出てきた。色も、最初は濃い茶褐色だったものが褐色になり、黄土色を經由してほとんど浣腸液そのものに近い、透明感あふれるものになっていった。匂いは、腸カタル系の、焦げ臭いような匂いから、硫化水素特有の腐った卵のような匂いが続き、胆汁質の渋い匂いを經由して、下痢便特有の胃酸過多の酸っぱい匂い、地面に落ちて腐った銀杏の実のような匂いに移り変わっていった。さらに音は、最初「みちみち、めりめり」という、硬いものが柔らかい肉壁を押し拡げる音に続いて、「ぷりぷり」というガスの混じった軟体の、チューブからの射出音が響き、「にょろにょろ」という、ノズルからのソフトクリームの流出音になり、最後は「しょばしょば」という液体の噴出音となっていった。音と硬さと、色と、匂いのなんとすばらしいグラデーション!! ワンダホー&ピューリフォー!! ついでに、ぷりてい~、らぷりい~、えくせれんと!!

それらの大便の匂いと、甘ったるい小便の匂いが玄室に充満していく...

最初に小便が出尽くし、その瞬間、魔理沙嬢は全身をブルブルと振る寄せた。

その一部始終を見ていたアリスは、ほほを赤らめ、感極まったような、恍惚とした表情で、玄室の床に全裸で体育坐りをしている。

そして、その後アリスがとった行動は、驚愕に値するものだった。

第七章 「きつつき」

一度は収まった魔理沙の排便ではあったが、まだ魔理沙の体内には浣腸液が残留しているらしく、その後も間欠泉の如く、思い出したように時折排便を繰り返すことになった。

アリスはそんな魔理沙に、たれるがままに糞を垂れさせておいて（きょうもよくたれています...たれ魔理沙）自分は玄室の床に全裸で体育座りをしている...頬を紅潮させ、魔理沙の大便の分娩・出産シーンに見惚れ、恍惚とした表情で...

もう、見ているだけでは堪らない、我慢出来なくなったアリスは、体育座りの状態から両足を開き、上半身を前へ前へと傾け、体を丸めていく。

なんとしたことか、柔軟体操の選手のように、異様に体が柔らかいアリスは、猫がするように、自分の体毛を...頭髪とも腋毛とも違う唯一の濃い体毛を自ら舐めて毛繕いし始めたのだ。

仔猫がのどかな春の日の陽だまりでするように、うっとり目を細め、すんなりとした脚を伸ばし、自らの股間に顔を埋め、毛繕いを始めるアリス。白金髪のアリスはまるで白くてふわふわの仔猫のよう。

見ると、ちろちろした薄桃色の舌が、次第に赤みを増していく。充血したアリスの舌は、ぼってりと赤く熟れた苺のように膨れていく。

さらに驚くべきことに、アリスの舌は太さが増し、それ以上にどんと伸びていく。まるでピノキオが、自慢げに嘘を吐けば吐くほどに、その自意識と並行して膨張していく絶頂天狗の鼻の如く...

（またまたまた余談だが、雌の天狗にはヒゲが生え、その鼻は、豆のようにぼっくりと小さく、その唇は縦方向に裂けているに違いない）

きつつきは、その鋭い嘴で木の幹に穴を開けた後、木の内部を喰い進んで巣穴としている虫を、その異様に長く伸びる舌で絡め取って食す。

きつつきの舌の外皮はその口の内ですべり滑り蛇腹状に折りたたまれている。そこに、頸部の両脇を通過し、後頭部を經由して額にまでつながっている...頭を一回りしている軟骨を、軟骨に沿うようにして伸びている筋肉を収縮させて鞘状の舌の外皮の中に押し出すことによってきつつきは驚くほど舌を伸ばすことができるのだ。

アリスの舌がどのような構造になっているかは知りえないが、いずれ似たような構造になっているのではなからうか。

最初は人間の少女のそれと違いがなかったアリスの舌も、充血が膨張に、膨張が怒張に、そして怒張が... 勃起としか言いようのない状態に変化していった。

例えるなら、仔猫の舌のようにうす桃色だったアリスの舌が、熟れた苺の実のように赤くなり、ウイナーソーセージのように長くなり、フランクフルトソーセージのように太くなり、サラミソーセージのように色濃く、硬くなっていった。

(なんて低俗。なんて陳腐。なんて愚劣。なんて破廉恥。なんて猥褻... 結局、生やすのか・生やすのか？ 生やしちゃうのか？？生やしてイイと思っているのかアリス！？清純派だと思っていたアリスが生やしちゃうなんて、くだらないほどアリガチだぞ！！)

(しかし、愛とか、幸せとか、糸吉女昏とかいうものは、低俗で陳腐で愚劣で旧態依然のものではなからうか。先鋭的な愛とか、前衛的な幸せとか、革命的な糸吉女昏なんて無いダロ？そういうのは旧態依然の伝統と格式と風習に則ってやるモノだろ！？)

(低俗とか陳腐というのは、つまり普遍的で伝統的ってコトだよ。うん。Raider Trad)

最初は中心部を避けて、周辺部からゆっくりと毛繕いを進めていたアリスだったが、その舌がサラミソーセージ並みに硬くなる頃には受け入れ態勢もできたのか、とうとう先送りしていた虚無の中心にゆっくりと、じらすように自分の舌を這わしていく。(物事の中心にはいつも虚無が... ぼっかりと穴が開いている、日本の中心東京、東京の中心には虚無の杜があり名前のない家族とその長たる虚無の老人が住んでいる。「虚無は日本国民の象徴である」「日本国民は法のもとに平等である」つまり虚無の家族それ自体は日本国民には含まれないのである。最初から例外を認めた上での法のもとに平等とはなんだろう？矛盾である。人間なんて、最初から平等じゃないんだよ。帝都の杜で死者たちが集う天上焦がすクリスタルのいかずち)

アリスの舌は最初は表面をなぞるだけだったが、遠慮がちに、すこし入り口に入っただかと思うとスグに出て、痛い目に遭わないコト、危険がないコトを確認するかのよう、に、恐る恐る少しずつ奥へ奥へと分け入っていく。そして、危険がないことがわか

るにつれて、だんだん大胆に、より激しく往復を繰り返すようになる。

興奮するにつれて、アリスの下目蓋が充血してぶっくりと膨れ、歌舞伎役者の隈取か赤いアイシャドーを塗ったかのように白い肌に下目蓋の赤みがくっきりと浮かび上がる。

まるで、下目蓋に赤いナメクジか血をたっぷり吸って膨れた蛭が吸い付いているようにすら見える。

さらにアリスの行為が激しさを増すにつれ、アリスの体はじっとりと汗ばみ、もともと白く透明感の高かったアリスの体表に粘液質の汗がにじむにつれ、紙に油をしみ込ませると透明になっていくが如くにアリスの肌は透明感を増していった。

そしてとうとうアリスはまるで、メダカか熱帯魚のネオンテトラのようにトランスルーセントになってしまった。

透明な皮膚の下、動脈が赤く、静脈はやや青みをおびて赤黒く、神経は黒く細い糸のように、頭骸骨や肋骨は蠟細工のような白濁した半透明とも、ネオンテトラの頭骸骨のような銀色ともとれる金属光沢を帯びた色に変わっていった。

貴方は人間の心臓がどんな形をしているか知っているか？ トランプのハート型というのは完全なウソとまでは言わないが、実際に生きて動いている人間の心臓は、特に膨れているとき（拡張期）は血の溜まったボール…球形だと思ふのがほぼ正しい。そして、胸の左側ではなく、ほとんど中央にあると思ふのが正しい。

アリスの心臓は、肋骨の鳥かごの真ん中で、寒さに震え綿毛を丸く膨らませた赤い小鳥のように、けなげにびくびく命の歌を歌い続けている。

アリスの腸は、メダカがそうであるように、銀色の腹膜で覆われている。

うっすらと透けて見える一筆書きの迷路のような腸の中では、腸の内容物が…今朝喰べたハムエッグとトーストだったものが黒っぽいシルエットとなり、腸の蠕動運動によってゆっくりと移動していくのが見える。

青い目と、目の下のどぎつく赤い下目蓋、口裂け女のような赤い唇、透明な皮膚の下に浮かび上がるやや金属光沢を帯び、それでいて蠟細工のように白濁した半透明の髑髏とそこに埋め込まれた白目と白い歯。アリスの髑髏は透明な熱帯魚のそのように、光の当たり方によって七色に…玉虫色に光り輝いていた。そして骨や血管や内臓が透けて見えるカラダ…

今やアリスの姿は人三化け七（にんさんばけしち / 人間3割、化け物7割）の妖怪

じみた... 妖怪そのものの姿であった。なまじ、人間に似ているから不気味で気持ち悪いともいえるが、人間とは別の存在... ある種の前衛芸術の作品、あるいはルビーとサファイアとクリスタルガラスを溶かし合わせて作った宝飾品として見るならば、一種完璧な美の具現化と言えるかもしれない。

透明感溢れる硬質のクリスタルガラスのような、強く抱きしめれば砕け散ってしまいそうな輝きを持つアリスのカラダが、軟らかくなまめかしくうねるように蠢く姿は生きた宝石と呼ぶにふさわしいものだった。可憐で優雅で美しく、宝石のように輝くその姿...

すんなりと伸びた両脚の間に上半身を丸めて頭をうずめるアリスの姿は、カマドウマのようでもあり、丸くなって自分の生殖孔に自分の授精器を挿入して蠕動するアリスの姿は、連れ合いが見つからないまま発情期・産卵期を迎えてしまったさみしい蝸牛のようでもあった。



(子宮とは、さみしい臓器である。さみしさは仲間を増やしたがる。だから、仲間を増やしたがる臓器である子宮はさみしい臓器であると云える。そして、さみしい臓器を内包する女性という性もまたさみしい性であると云える。女性が、目的もなく群れたがり、意味も無く会話を続けたがるのはさみしいからである)

アリスの感情が昂ぶるとともに、アリスのカラダの動きもまた激しさを増していった。アリスの舌の激しい往復運動は、その滑らかさとあいまって、アリスの口から出ている舌が股間にめり込んでいるのか、股間から生えているモノをアリスが口に咥えているのかわからなくなるほどである。さらに動きが速く、滑らかになるにつれ、まるで、断面が円に近いオムスビ型をした赤黒いVベルトが、一方的にアリスの口から

押し出され、アリスの膣の中に無限に潜り込んでいくように...まるでアリスのカラダの中をベルトが一周して、そのリングがグルグルと無限に回り続けているようにすら見えてくる。

激しい運動で、息を切らせたアリスが、「んっんー、んっんー」と悶え声を上げる。

口がふさがっているのだから、鼻声しか出せないのだ。

1個1個数えられるアリスの脊髓、1本1本盛り上がった肋骨とその隙間の溝...アリスが呼吸するたびに、アリスのカラダは風船の如く膨張・収縮を繰り返す、それに伴って脊髓の描くカーブが滑らかに揺れ動く、肋骨と肋骨の間隔が膨れ、しぼむ。春風にそよぐドナウ川の水面のようになまめかしく波打つアリスのカラダは、興奮しきって全身から滲み出すねっとりとした粘液質の体液をまとい、てらてらと光り輝き、それ自体が明滅を繰り返す深海生物や警報灯のよう。油脂をたっぷり注された歯車が噛み合い、離れるときに発する、にちゃにちゃという音が高速で繰り返されることによってリュリュリュリュリュ...と聞こえるような軽やかな回転音が響く。腕のいい職人が作り上げた、時計仕掛けの人形のような、正確無比なピストン運動が続く。

いつまでもスピードが上がるかと思われたアリスの動きに変化が現れ始めた。限界が近づいているらしく、その規則的な運動の中に不規則な振動が混じりだした。

美しい円運動とサインカーブの繰り返しに、小刻みで不気味な振動が割り込み、左右対称な前後運動・上下運動、ピストン運動に対し、よじれるような...回転数を上げすぎた機械が壊れる寸前のような左右非対称で予測不能な運動が混じるようになってきた。

「んくぅ〜ん」というような、小動物の断末魔のような悲鳴を上げたかと思うと、壊れた瞬間の機械のようにアリスはひととき激しくカラダをよじり、自分の舌は股間に深々と挿し込んだまま急に脱力して小さく丸くなってしまった。

アリスはしばらくの間びくびくと思い出したように時折カラダを痙攣させ、なにやら浅い夢の中で自分の行為の余韻に浸っているようだ。

どれくらい時間が経ったろうか。たっぴりと余韻に浸りきったのか、浅い夢から覚めたのか、細身ですらりとした姿のアリスがゆらゆらと立ち昇る陽炎のように起き上がった。

股間に挿さったままだったアリスの舌も、絶頂期のサラミソーセージ状態を脱し、今はチョリソソーセージ程度の太さと硬さに落ち着いていた。

その、アリスのチョリソソーセージがアリスのその穴から抜けた瞬間、白っぽい懸濁液がどろりとアリスの股間から滴った。さきほどからの魔理沙の糞尿の匂いに混じって漂う、青臭く濃厚な栗の華のかほり。そしてたなびく幽かな磯臭いかほりと酸味を帯びたかほり...

産卵期のメスの鱈の腹には自らの体重の3割を越すのではないかと思われるほどの卵...いわゆる「たらこ」が蓄えられ、収納されている。それでは、オスの鱈の腹の中にはナニがあるのであろうか？ 当前のコトだが「しらこ」が、精子が蓄えられている。そしてそれ...鱈の精子嚢はなぜか「キク」と呼ばれている。大脳新皮質が発達した高等動物の脳のようにくねくねと迷路のようなひだをもち、腹の中に所狭しとぎゅうぎゅうづめに押し込められた精子嚢。(「キク」は「てんぷら」や「お吸い物」の具にすると美味しい)

幻想郷の少女たちは実は全員「オス」であり、生えている...という説がある。シュウティンゲムは男の側から見たセクスの象徴なのだから、登場人物もまた少女に化けた男なのだというのである。そうなのかもしれないが(そーなのかー) 幻想を破壊するのがこのSSの目的ではないので、その説にこれ以上言及するのはやめよう。(やめよう!! やめよう!!)「エリノア・ワイゼン、発進しますッ!!」
(そういえば、アリス・ワイゼンってのもいたっけな)

自分の淫らな行為でそれなりに満足したのか、今のアリスの表情からは、いつもの張り詰めたような陰しさが薄れ、しどけなくもどこかしら優しげな雰囲気は漂っていた。

なにせよ、アリスの頭の中には「脳」のかわりに「きく」が、「しらこ」が...「精子嚢」がぎゅうぎゅうづめに詰まっっていて、アリスは精子とイヤラシイ妄想で頭がたっぷり一杯で、世の男性が全てそうであるように、淫らで愚劣で身勝手なやらしい精子嚢で犯罪的にイヤラシイことばかり考えていたのかもしれない...淫獣アリス。(アリスは精子で考える)

アリスは自分の股間から臭気を放って垂れ落ちる体液を拭おうともしない、トロみのある体液が、彼女の女性格闘家のように逞しくも白い太腿を伝って床に滴っていく...

そしてアリスは照れくさいような呆けたような表情で、自分の頭を掌底で軽く小突

く。

舌が出しっぱなしなので喋れないが、彼女の心の声は「あん、またヤっちゃった！」と言っている。とりあえずしばらく、彼女の心の声に耳を傾けてみよう…

「あん、またヤっちゃった…コレでまた私の水蛭子が生まれるんだわ・生まれちゃうんだわ。この世に生まれてきてはイケナイ、骨も皮もないドロドロしたカタチの無い水蛭子、消化管と中枢神経と数えるほどの周辺組織しかない不定形生命体…その魂はどこから来るのかわからない。業が深すぎたのか、生きることも死ぬことも出来ず、幽かな光を求めて、私の胎の奥の、この世とあの世の結節点に縫り付いて、こちらの世界に出てきたがる不幸な魂。こんなところに縫っても、もっともっと不幸になるだけなのに、なるしかないのに、ソレがわからない不幸な魂。愚かな魂。コレでまた、魂の容れ物を…アンティークドールを造らなくちゃならなくなったわね…これでまた私の可愛い人形が、可哀想な人形が、不幸な人形が一体増えるんだわ。うふふ」

「私が産むのは骨と皮のない、およそ人間には見えない水蛭子。私が作るのは、内臓を抉り出し骨と皮だけを残して樹脂を詰め込んで人間らしく外見を整えた人間剥製。うふふ。私って、なんて業が深いのかしら、なんて業が深すぎるのかしら」

「そんなコトより大事なコトに気づいたわ。いえ、思い出したわ！そうよ、わかっちゃった・わかっちゃった！なーんだ、こんなに簡単なんだ！！世の中って良くデキてるのね！世界って、宇宙って、こんなに簡単に出来たのね！！どうしてこんな大事なこと、わかりきったことに今まで気づかなかったのかしら！？うふふ」

「魔理沙に私の子供を産ませるの！！私たちの愛の結晶を創るの！！魔理沙に私の種付けをして、二人の子供を創るの！！魔理沙の子供が出来れば、魔理沙が死んでも悲しくないわ！！魔理沙の子供が産まれたら愛の英才教育をして、私だけの愛情をたっぷり注ぎ込んで、魔理沙の子供が立派なおトナになったら、今度こそ魔理沙の分身と私が結婚するのよ！！すばらしい、すばしいわ！！すばらし過ぎるわ！！」

「そうと決まったら、「善は急げ」よ！魔理沙と交尾して、魔理沙を受精させて、魔理沙を妊娠させて、分娩させて、出産させるのぉ！！魔理沙ぁ～！妊娠してえ～！！！！」

「私のしらこを、精子を・精液を、たぶ～り貴女の膣に注入してあげる。貴女の子宮の中で私の精虫と貴女の卵子が会って・私のカワイイ精虫が、貴女の可愛らしい

卵子にへばりついて、馬乗りになって、卵子の中にぐりぐりと己がカラダをねじり込み、もぐり込ませて、レイプして、結ばれて・結合して・合体して、有精卵(ヤマギズムう~)・受精卵になっちゃって、貴女の子宮壁にわたし「たち」の受精卵が着床して、子宮壁に着床した受精卵が貴女の血肉をちゅうちゅうと吸って・吸い取って、むくむくと成長してナメクジみたいな未熟児に、未熟児からリトルグレイみたいな胎児に、胎児から猿みたいな新生児に肥大化し・成長するのぉ~!!!」

「さっき可愛い糞便を出産したみたいに、私の・私たちの子供、貴女の分身を、その安産型のかわいらしいおしりからぷりぷりとひり出してェ~!!!」

「今こそ、合体よ!!!貴女と合体するのよぉ~!!!!」(ハァハァ)

(アリスの顔は輝き、法悦に浸ったように・浸りきったように目を見開き、随喜の涙さえ流して・流れるに任せて拭おうともしない。おおグローリア、主よ・いと高き神の栄光よ!!!おらといっしょにパライソさ逝ぐだ(羯諦羯諦 波羅羯提)!!!魔理沙といっしょにパライソさ逝ぐだぁ~(波羅僧羯諦 菩提薩婆訶)!!!!)

第八章 「受胎告知」

アリスは脱脂綿を取り出し、消毒用アルコールをたっぷり含ませると、それで魔理沙の、糞便にまみれた肛門を拭った。魔理沙の腸内の浣腸液は出尽くして、排便行為は完了しているようである。ついで、新しい脱脂綿をアルコールに浸すと、今度は魔理沙の尿道口周辺から膣口の周囲を丁寧に拭った。

眠り続ける魔理沙は、肛門が、膣口が、陰核が、大陰唇および小陰唇が、高濃度のアルコールで刺激されぴりぴりするの、まるで鮑の踊り焼きのようにあるいは塩をかけられたナメクジのようにきゅーっと縮こまり、不思議な蠕動運動をぴくぴくと・クネクネと・ゆるにゆると繰り返した。

アリスは魔理沙の股間の下に挿入していた金盥に使用済みの脱脂綿を放り込み、待ちきれないかのように金盥を脇に押しやると、細いけれど筋肉の固まりのナメクジのカラダのような両腕で魔理沙の太腿をがっしりとつかんで、魔理沙の下腹部に顔を近づけ、馬乗りになる。

チョリソソーセージのようだったアリスの舌が、もうガマンできない、早くしたいとばかりに、あっという間に黒光りするサラミソーセージのように硬く・太くなっていく...

魔理沙は、鮮やかで色が濃く、きつい香りを放つ南国の蘭の花。左右対称に、けれども上下には非対称にいやらしく縦に裂け、その奥に甘い蜜をたっぷりと秘めた妖しい蘭の花。

そして、アリスはその蜜を吸いに来た、巨大な七色の猥褻な揚羽蝶。

破廉恥な揚羽蝶はその長い舌を卑猥な花卉の奥に差し入れ、淫らな蜜を吸おうとしている...

(ああ、なんとまあ、陳腐で通俗的なありふれた表現！！文学は死んだのか？文学は死んでしまったのか！？文学は死んでいいと思っているのか？？どうなんだっ！？？えっ！？ ひっひっひ。 誰が文学を殺したのか？ 誰が文学死ぬのを見たか？ 「それは私」と土竜が言った、「小さなこの目で私が見ていた」 あっそーれ、だーれが殺したクックロビン)

アリスはじらすように、からかうように、楽しむように、魔理沙の外陰部を嘗め回す。下から上へ、上から下へ... 何度も何度も、執拗に、イヂワルして泣かしてしま

ったいぢめられっこを、なだめすかして再び家から誘い出そうとするかの如く、辛抱強く、邪悪かつ子孫繁栄という彼女にとっては切実で大真面目で神聖な欲望を内に秘め、優しく、優しく、どこまでも優しくに...

愚劣さというものは本人が切実でマシメであればあるほどますます滑稽さに磨きがかかるものである。まるで無声映画の主人公がニコリともせずには愚かな行為を繰り返すほど観客は大哄いするように...

人形のように無表情なアリスこそ、滑稽なコメディ映画・無声（夢精？）映画の主人公にふさわしい存在なのかもしれない。

そうこうしている間にも、眠り続けながらも卑劣なアリスに局部をねぶり廻され続けた哀れな魔理沙の体は、本人の感情や意識が飛んでいるのをイコトに、執拗な愛撫に反応してしまい、米空軍機のフライングブーム方式給油口のようにパツリと開いて潤滑油すら滲み出してしまう始末である。ああ、こんな女性の人格を全否定するような、女性を性の道具としてしか見れないような表現が叩かれてイものであるのか？（いや、よくない！！（反語表現））

「ああん、魔理沙あ、今こそアツのなけなしの『春』を奪ってあげるわ！」

「幻想郷では、『春』は「鬻ぐ」モノでも「贖う」モノでもないわ、奪うモノよ！！力の無い者、知恵のない者、実力の無い者には永遠に春は巡って来ない！！」

「これからの時代、実力主義の時代には、国家や福祉に頼っては行かないわ！社会主義、悪しき平等主義ばかりがはびこる世の中では、本当に実力のある人間、情気のある人間は、より高い報酬を求めて外国に引き抜かれてしまう... そうしたら、結局国の経済自体が落ち込んでしまい、国全体が貧しくなって、結果的に不幸な人間が増えてしまう... そうならない外にも、実力のある人間が成功するという、イ見本（ホリエン・村IEン）を示すから、真似をして成り上がるのよ！！うきき」

そして、とうとう、アリスの極太の舌が、魔理沙の尿道でも肛門でもない穴の入り口にぴったりと押し付けられたと思うとグッと力を込められ、内部に入り込んでしまったのである。あああああ、なんて才だ！としかえしのつかない才を！抜き差ししない才をおマママ！！（抜き差ししちゃう外）

アリスにとっては待ちに待った瞬間！ そのとき、アリスは先ほど自分の内部に

分け入ったときとは違った、異質な感じを味わった。音がしたわけでもなく、そんなに大きな衝撃があったわけでもないのに、何かが壊れたような、プチという、水の入った小さなゴム風船を針でつついて破ったような不思議な感じがしたのである。

アリスが、ぴくっと体を震わせ、何かと一度挿入しかけた舌を引き抜いてみると、タラリと極わずかな出血がある。

それを見たアリスは、それを理解し、嬉しいような悲しいような苦々しいような甘酸っぱいような、遠い昔を思い出すような万感を込めた表情をして、もう一度魔理沙の内部に、先ほどよりもずっと丁寧に、優しく、哀れむように・いつくしむように分け入っていったのである。

神、天使、悪魔、妖怪... これらの存在は生物の、特に人間の生体エネルギーを糧にして自らの存在を維持している者達である。ある者は信仰心という嗜好で、ある者は生贄として、ある者は対象の体に傷をつけ、血液と共に流れ出すプラーナ（生体エネルギー）を吸い取ることによって、自らの霊体が宇宙の無秩序の中に紛れ、ノイズにかき消されてしまわないようにしているのである。そういう意味では、神、天使、悪魔、妖怪... そういった存在は全て、広い意味で吸血鬼の一種とも言えるだろう。

アリスは妖怪であり、狭義の吸血鬼ではなかったが、人間の生体エネルギーを味わい、喰べることもできる存在だった。

意識を失った魔理沙の体が愛撫に反応した反射としての肉体の躍動感・肉体の凹凸と、血と、わずかな傷口から漏れ出すプラーナがアリスの舌を刺激し、アリスの中樞に味わったことのない濃厚な旨味が、痺れるような奔流となって押し寄せた。

（おいしい、おいしい、魔理沙がおいしい！！

イケナイ、イケナイ、ガマンしないと、おいしすぎて、このままだと魔理沙を吸い殺してしまう... でも、やめられない・とまらないいい！ チュバツ、チュバツ、チュバツ、チュバツ、ちゅるちゅるちゅるちゅる、ちゅっちゅっちゅ～、はぁはぁはぁ)

ギリギリの線で踏みとどまったアリスが、仕切り直しを蹴ために